
不思議の国のアイリス

ざしきのわらし

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

不思議の国のアイリス

【コード】

N2295E

【作者名】

ざしきのわらし

【あらすじ】

菖蒲あやめは普通の高校1年生。しかし『開かずの扉』を抜けたらそこは 不思議の国。様々な思惑が渦巻く中、『アイリス』の名を受け継ぎし少女の悲しき因果による戦いが始まる ……

プロローグ

“二人の心”は“世界の心”。

“世界の心”は“二人の心”。

胸に刻むは希望の光。

秘めたるは絶望の闇。

二人を結びつけるは、心の運命^{さだめ}か。

はたまた神の残酷な遊び心か。

真相は、
ピョロピョロピョロとさきのみじかに扉の向こうへ消えていく。

そして君はもうその扉の前。

心の準備は出来てるかい。

出来て無いならお気の毒。

さあ開けて。扉を開けて。

君は不思議の国の運命を変えられるかな。

それとも運命に吞まれて闇に沈んで行くかな。

行ってみなけりや分からない。

どんな結末かも分からない。

あつ、さつきから喋ってるお前は誰だつて？

僕の名は“赤毛のノーティ”

“ノーティ”はいつでも困ってる人の味方だよ。

ふふふ。

“ 困っているヒト ”、のね。

さあ恐れずに前を見て。

“ アイリス ”

君にしか出来ないんだよ。

その手で扉を開けるんだ。

不思議の国の運命を握るその手で開けるんだ。

過去を探す為、未来を開く為……

カード1：変わらぬ朝

あれ。

さっきのは、夢……？

カーテンから溢れる温かい光。

しかし眠気を帯びた瞳は固く閉じられ、“朝”という現実から逃避する。

そして再び夢の中へ戻ろうとするが、秒差で目覚まし時計がビリリツとやかましく鳴り響いた。

5分置きのスヌーズ設定にしていたのをすっかり忘れていた。これには少女もうめかずにはいられない。

あああ。

うるさい……。

腰ほどまで伸びた髪をばさつかせ手当り次第に頭上を叩く。

布団。クマのぬいぐるみ。ベッドの縁^{ふち}。そして目覚まし時計のポタン。

カチツという軽い音と共に騒音が途切れ、ほっと息を吐いたまま枕に顔を埋めた。

やっぱスヌーズは便利だけど二度寝の邪魔だね。

今度から5分遅くに目覚まし設定しよつと。

“スヌーズ機能”とは二度寝をしてしまった時などの予備鈴。全

く機能を理解していない彼女は、気にする事なく渋々と起き上がった。

少女の名は『宮原^{みやはら} 菖蒲^{あやめ}』

高校1年生で今は祖母の家で暮らしている。

両親は共に行方不明。そういうのも15年ほど前、真冬の寒い時期に祖母の家の前に菖蒲が置かれていたそうだ。

ただ一言。

『ごめんなさい』と書かれた手紙と共に。

それ以来、二人の行方を知る者はいない。それに菖蒲本人も両親を憎くんだ事はない。否、顔も知らない相手を憎みようがなかった。

祖母だつて愛情持つてここまで育ててくれたのに、その子供達を憎むなんてあまりにも可哀想だった。

菖蒲はベッドに座り込み、ぼおっと木張りの床を眺める。

大体四畳半ぐらいの部屋。決して広くないが、一人部屋には十分窓辺にも、桃色のベッドにも、クマやらウサギのぬいぐるみが飾られている。

その中でぐったりとうなだれる菖蒲は、どうにかすれば働き疲れたくるみ割り人形のように見えた。

あの夢は何だつたんだろう。

つかの間の夢。

声が聞こえた。遠い夢の中、誰かが何かを話していた。

しかし夢ほど曖昧な物はない。

目覚めた瞬間は覚えているのに、たった数秒で記憶の花は散って行く。

でも何となく覚えてる。
私に、何を伝えたかったんだろ。

その者が自分の名を名乗っていたが今となっては思い出せない。
“扉”がどうのこうのと行っていたが全く思い出せない。
しかし菖蒲は別に気にしなかった。

だって。

私には関係ない。

そんな事を言われても何も出来ないのだから。

菖蒲は呑気に大きな欠伸をした。

だが欠伸を出しきる前に、老婆のしがわれた声が足下から昇りつめて来る。

祖母だった。

『菖蒲え、まだ寝てるのかいッ学校に遅れてしまうよ!』

下の階から叫んでいるので時より声がかすれている。
だがそんな事はどうでも良い。

「えっ今何時？」

菖蒲は慌てて目覚まし時計を手取る。

現在の時刻、7時30分。

ちなみに7時45分からは先輩の“加奈りん”が迎えに来る。

それなのに未だパジャマ姿。

更に寝癖でバサバサの長い髪。

や、ヤバイ。

血の気が引いていく。“加奈りん”は怒ると怖い。待たせたりしたら空は快晴なのに、菖蒲の頭上だけ血の雨が降りだすだろう。もはや夢の事なんて考える余地も価値も残っていないかった。

急がねば殺られるッ

菖蒲はすぐ様下の階へ駆け出した。

自分の命がかかっているならば走らずにはいられなかった。とりあえず時間がない。

「おばあちゃんツ学校の用意手伝ってええ！」

そう。

本当の意味でも、世界的にも……

『残された時間は少ない』

ぶすぶすう……。

菖蒲の長く整えた髪から、正しく言えば頭から煙が出ている。

結局朝は間に合わず、何十分と待たされた加奈りんに思い切り殴られたのだ。なのに加奈りんは驚異の速さでギリギリ登校し、遅刻

したのは菖蒲だけ。

殴られて気絶し、道端で放置された菖蒲だけ。そしてやっとの
思いで1組のクラスまで昇って来たのだ。もはや1時間目が
終わり、10分休憩に入ってしまったが。

うう……。

どれもこれもあの変な夢のせいだッ。

机に頭を伏せ、巨大なたんこぶを抑える。

たんこぶも痛い、今まで皆勤賞だったのにあんな夢のせいで崩
れた事が、何より悔しかった。

「菖蒲……大丈夫？」

頭上から声が降りかかり、顔を上げた。そこにはクラスメイト
の女子。髪を下の方で二つに束ねた“神楽”かぐらがいた。

「かあぐうらああ！」

「あつもつどうしたのよ」

困惑する神楽の小さな身体に抱きつき、状況を説明していく。

「変な夢見て、加奈りに殴られて、皆勤賞剥奪されて……」

「夢の中で殴られたのツてか皆勤賞まで剥奪うう？」

明らかに説明不足である。

しかし完全に信じきった神楽は困ったように頬を掻いている。
真面目な子なので自分なりに解決策を考えているのだろう。

すると何か思いついたのか、神楽はポンツと手を叩いた。

「菖蒲、そういう時こそポジティブにいかなきゃッ」

ぐつと拳に力を入れる神楽。

「私も落ち込んでいた時、お兄様に教わったの」

「えっ何を？」

「人間は必ず失敗をし、その失敗を後悔して文明を広げていく”
つて！」

慰めがデイーブ過ぎて重ッ！

思わずツッコミを入れたくなるが神楽は大人しいし、加えてブラ
コン。

あんまり言つと、泣き出してしまつかもしれないのでツッコミを
何とか押さえた。

「なあに、あたしは仲間外れかい？」

不意に聞こえた足音。

本日の菖蒲へ血の雨をもたらした張本人が、にたにた笑いながら
こちらへ向かって来る。

「加奈りんッ」

茶髪頭に加奈りんが、菖蒲の机にどかっと座り込んだ。

いや。

何で3年生の加奈りんがわざわざここに来る？

「よお菖蒲。今日は気絶してから1時間7分13秒のお目覚めが最高記録おめでとう」

ケラケラと笑いながら加奈りんは菖蒲のたんこぶを摩った。

ちなみに旧最高記録というのは、49分59秒。何故殴られたかと言うと加奈りんが菖蒲にコンビニで『菓子パン買って来て』と言ったら……。

『“ガスパン”買って来て』

と勘違いし、本当にホームセンターまで行って買って来たのが原因だった。

「おめでたくないッて。加奈りんが殴るから私の皆勤賞崩れちゃったじゃんか！」

「やかましい。あたしなんか毎年きんしん謹慎になっちゃうから皆勤取った事ねえしハハハハハハ」

「ある意味笑い事じゃないアルヨ」

「あ、なんなら担任脅して遅刻を取り消してもらおうか」

「駄目に決まってるでしょ！」

菖蒲は加奈りんが本当に職員室へ殴り込みに行きそうだったので

慌てて押さえこんだ。

傍らで見守る神楽は呑気に口元を隠して笑っている。笑ってる暇があるなら手伝えと言いたかったが口を開いた瞬間、手の中にいた加奈りんの感触が消えた。

「あっそうだ！」

両脇に腕を通すように加奈りんを確保していたが、しゅるりと身をかわされた。

油断しきっていた菖蒲は突然の事に身体を崩し、鼻から床に激突。知らずと涙が視界をつるませる。

加奈りんは詫びる様子もなく、しゅっと指を振り上げた。

「あたし、神楽と菖蒲に頼み事があつたんだ！」

「なに加奈ちゃん？」

「な、なに。加奈りん？」

首を傾げる二人に対し怪しく微笑む加奈りん。この時ばかりは加奈りんは無邪気な子供のように瞳を輝かせる。

でも、何となく嫌な予感がした。

『おう。実は旧校舎にあるという“開かずの扉”を開けて見ようと思ってるなッ』

「……………」

「……………」

暫しの沈黙。

あまりにも唐突で、あまりにも馬鹿らしくて、あまりにもメリックを感じられない提案。

これには隣に立つ神楽もひくひくと頬を引きつらせる。菖蒲も硬直していたがわなわなと手を震わせた。

そんなくだらない事……。

「勝手に一人でやってるおおおツツ！」

「うおッ。菖蒲が怒鳴った！」

「あああ菖蒲落ち着いてッ」

頭から煙を出して怒り狂う菖蒲。まあ当然の反応だろう。

神楽は暴れる菖蒲にしがみつきながら問題児に尋ねた。

「でも、なんでまた旧校舎なんて……………」

正式名称・“清城中学校旧校舎”。現在は老朽化の為使用されていないが『幽霊が出る』と、もっぱらの噂である。

しかし加奈りんは気にする様子もなく、満面の笑みを浮かべた。

「良くぞ聞いてくれました！ 昨日、ゲーセン仲間と遊んでたら話題なつてよお。旧校舎の第二音楽室に“隠し扉”があんだって」

ますます私らに関係ないじゃん。

菖蒲は大きくため息をついてうなだれた。

「正式には第二音楽室を横断した楽器庫の中にあるらしいけど、それがまたどんなに引っ張っても押しても開かないそうだ」

「でもなんで加奈ちゃんがその扉を開けたいと……」

「あたしの勇気と力こぶを周囲に自慢してやるのさ！」

えっへん、と胸を張る加奈りに再びため息。昔から知ってたが、加奈りの探求心と自慢癖は相変わらず変わっていない。

無論、神楽も分かっているので不安そうに視線を泳がせている。

「で、でもお兄様も七瀬君も言ってたよ。そういうお化けが出る所や七不思議みたいな所は行かない方が良いつて」

「甘いぜ神楽ッ コーヒーに砂糖30杯入れた位甘いぜ！」

いや。

それはすでに『コーヒー味の砂糖』だよ。

「そいつらは遠回しに“夢を壊すな”って言いたいのさ」

嘘つけええッ。

明らかに危険だからって忠告してるじゃんか！

「あ、そうか」

「神楽あんた何納得してんのよおお！」

バシツと神楽の頭を勢い良く叩く。

加奈りんのペースに呑み込まれ、つついッツコミが表に出てしまっ
まう。

叩かれた神楽は、ぐるぐると目を回して倒れ込んでしまった。

もはや一対一の対決。

「さあ菖蒲、神楽も納得したみたいだし今日の夜行くぞ」

「私はイヤッ」

「強情だな。もう多数決で決まったんだから」

「イヤッたらイヤ！」

菖蒲は頬を膨らませながらぶいっつと横を向いた。

そんな所に行ったら面倒な事になるに決まってる。

しかし加奈りんはにたにた笑っていた。

「帰りにアイス買ってあげるからさあ」

「まだ冷凍庫にあります」

「じゃあ今度コンビニでジャムパン買って来るからああ」

「私ジャムパン嫌い」

「……もしかして『怖い』の？」

その一言に菖蒲は再び加奈りんを見た。

「凶星？」

楽しむようにこちらを見て来る加奈りん。

確かに幽霊が出るという噂もある。怖くないと言えば嘘になる。でも『怖い』と認めたくなかった。

怒りや恥ずかしさのせいかな顔があつと熱くなる。

「怖くなんかないもんツただ ……」

「じゃあ決定ツツ！」

待ってましたつと言わんばかりに加奈りんが大げさに手を叩く。迂濶だった。

「ちよつと加奈り………」

キーンコーン

菖蒲の言葉を遮る授業開始のチャイム。

さつきまで話していた生徒達も急いで席に着き始めた。

今や教室一杯に響くのは椅子を引くガタガタと言う音のみ。その中で加奈りんは、小さく舌をだしながらウィンクした。

「じゃあ今日の夜待ってんぞ」

「待って。私まだ行くなんて ……」

「後カメラ忘れんなよあたしが扉を開けている証拠写真撮んだから！」

一方的に用件だけ告げると、加奈りんは教室を出ていく。毎度の事ながらの授業放棄、恐らく保健室へ向かったのだろう。だが残された菖蒲は呆然とするしかない。

私には、関係ないのに……。

そつだ関係ない

『扉』なんて関係ない。

『扉』なんか ……

と、びら。

今朝の夢を思い出し、不思議と寒気が立った。

菖蒲は思わず自分の二の腕を握りしめる。

何かがおかしい。

偶然過ぎやしないか。

今日の夢と言い、加奈りんの誘いと言い、“扉”の話題がずっとつながっている。

まるで“扉”を目印に、菖蒲の歩く道を新しく建設されたような

誰かが人生の地図を変えてしまったような。

菖蒲の人生が大きく狂って行くような。

気のせい、だよな。

菖蒲は不安を隠すかのようにぎゅっと手を握る。

他人から離れるように

自分から目を反らすように

心から逃げるように。

迫り来る現実から

距離を置いても

『思い出の蕾』は

もう、ふくらみ始めている
……

カード2：『開かずの扉』

希望を忘れた旧校舎。

絶望に沈んだ旧校舎。

しかし今夜は客人がやって来る。

“希望”の名を継いだ『アイリス』がやって来る。

お茶の準備は出来たかい。

踊り子は呼んだかい。

後は笑顔も忘れちゃいけないよ。

準備が出来たら

音楽を流して

華やかに

爽やかに

君を出迎えよう

深夜午前2時。

周囲はどっぷりと闇に浸り、星々の輝きも黒い雲に隠れてしまっている。

その中、闇に沈んでも尚建ち続けている旧校舎。

生温い風と虫達の歌声を背負い、何十年も建ち続けている旧校舎。そして弱々しい校舎を守るかのように建築された石垣の前。数年ぶりの“客人達”が出陣の時を見計らっていた。

「おらあッいよいよ旧校舎に殴り込みだコラアア！」

「私、真夜中に出かけたの初めてだよオ」

真夜中だと言うのに大声で叫ぶ加奈りんに対し、ぱたぱたとはしやぐ神楽。

二人の声は深夜の街にキーキーと響き渡り、少し距離を置いて立つ菖蒲ですらやかましく思う。

加えて言えば、何十年と使用されていない廃屋と言っても近くには清城中学校がある。

つまり騒げば騒ぐほど誰かに見つかる可能性が高くなるのだ。

近くに警官や補導員がいたらと言う危機感はないらしいね。

補導の事も何も考えていない脳天気な二人に対し、菖蒲は大きなため息を吐くしかない。

そう。菖蒲達は昼間話題になった旧校舎の『開かずの扉』とやらを探しにやって来たのだ。

無論、半ば強制。菖蒲の良心はことごとく彼女達に無視された。

私、ホントにこういうの嫌いなのに……

面倒な事に巻き込まれなければいいが、と思うが加奈りんが提案した『暇つぶし』で何も起こらなかつた事はない。

必ず警官に見つかったり、近所のおばさんに怒られたり、先生に怒鳴られたり、その他もろもろ。

そして決まって謝るのは、事柄の被害者とも言えるはずの菖蒲と神楽。

本人曰く、加奈りんは他人に謝るのが一番大嫌いだと自慢気に語っていた。

言い換えれば自分の非は意地でも認めない最悪な性格の持ち主だと思う。

今日は何も起こりませんように。

菖蒲は諦めるように目をつむり、ぱんツと手を合わせ今日の無事を祈った。

「おおい菖蒲え。旧校舎侵入に備えて作戦会議しようぜ」

「菖蒲も円陣組もうよッ」

旧校舎の入口で、加奈りと神楽が手をぶんぶん振りながら叫んでいる。

いやいや。

旧校舎侵入に作戦会議も何もないんじゃないの。

しかも円陣組むって意味が分からんよ。

半分呆れ顔の菖蒲だが、苦笑しながら二人の元へ駆けて行く。
もう言い出したら止まらないのがクレイジーコンビ。
ならば。菖蒲のするべき事は一つしかない。

旧校舎の入口まで行くと、既に肩を組んでいる加奈りんと神楽の
間に割り込み、自分も肩を組む。

未だに円陣を組む意味が分からないが、これはこれで赴き（？）
があるのかもしれない。

「菖蒲来んのが遅えよ」

「いやあ開き直るまでに時間がかかってさ」

「菖蒲は最後まで反対してたもんね」

いや、それは上手い具合に神楽が加奈りんに丸め込まれたただけだ。
そうツッコミを入れたくなるが、また騒ぎになるのでやめておく。
三人はニヤリッと笑い、夜の空の下 限界まで声を張り上げた。

「いいか菖蒲、神楽。絶対油断すんな」

「「おっ」

「何が起きてても、扉は開けて帰るぞ」

「「おっ」

「そして忘れんな」

「「おっ」

『どの部屋に入る前にも必ずノックを』

「「お、おう!?!」「」

『しかも2回だ』

いちいち細けえッ!

「そして万が一、宙に浮く半透明な未確認生命体YUREI及び未確認生物O B A K Eを発見した場合の話だが」

「「……おう」「」

いや、普通に“幽霊”と“お化け”って言いなよ。

『根性で捕まえて思い切り人間流パシリ地獄を味わせてやるっぜッ
』!』

「貴様いつぺん祟られて地獄に堕ちろオオ!」

「あ、菖蒲落ち着いてッ」

この時は知らなかったんだ。

不良の加奈りん。

優等生の神楽。

ずっと一緒に。

ずっと仲良しで。

ずっと笑い合って。

でも、今日で終わる。

この関係も。

この笑顔も。

全てが終わるから ……。

旧校舎内部は表以上に老朽化が進んでいた。歩くたびに床が軋み、酷い場合は床が抜けて足がはまってしまう。

まあ加奈りんが先頭を歩いていたので、ほとんどの危険部位を制覇してくれた。

おかげで菖蒲と神楽は無傷で廊下を歩く事が、犠牲として加奈りんの足は青痣だらけになってしまったのだが。

「ちくしょ ……全部終わったら旧校舎を火の海にしてやる」

いや、ソレは流石にフオロー出来ないから。

よっぽど痛かったのか、加奈りんが涙目で眩く。

菖蒲は仕方がないので加奈りんの頭をポンツと撫でてやった。こつという所は子供ばいっつと言うか、なんと言うか。

しかも加奈りんは見取図も何も持って来ずに、初めて来た旧校舎の音楽室へ向かおうとしているのだから驚きである。

無論、菖蒲が見取図をなんで持って来なかったのかと尋ねると

……。

『あたしは我が道を行くツ！“道”は自分の手で、自分の目で、自分の足で見つけるからこそソレ相当の価値があるのだあ』

……と、意味が分からない論弁を述べ、すたすたと廊下を歩いていってしまった。

本人はかっこいい事を言ったと思っっているが、実際は行き止まりになったり、大量の鼠軍団に襲われたりとむしろかっこ悪い。

こんな調子で本当に音楽室に辿りつけるのか、菖蒲は再びため息をついた。

「菖蒲菖蒲え」

すると神楽がにこにこしながら、菖蒲の服を引っ張る。

朝までに帰れるか分からない状況で良く笑ってられるなあと、ある意味感心してしまった。

「なんか、『初めて加奈りに会った日』を思い出すよね」

「初めて……加奈りに？　　ああ、そっか」

そこで神楽の笑っている理由が分かり、菖蒲もつられて微笑んだ。

そうそう。

小学生のとき、加奈りんと初めて出会った場所もこんな風に暗くてじめじめしてて……。

ずんずんと先を歩く加奈りんの背中を眺めながら、ゆっくりと昔の記憶を思い出していく。

……小学生の時、菖蒲は神楽を引き連れて良く『秘密の場所』へ行って遊んでいた。

誰も知らない。

誰にも知られない。

菖蒲と神楽だけの“秘密の場所” だったはずなのに。

ある日、“先客”が来ていたのだから。

『ここはあたしが見つけた。ここがあたしの居場所だ。分かったら消え失せる』

ボスッ。突然立ち止まった加奈りんの背中に菖蒲の鼻が埋まった。その衝撃で記憶の中の加奈りんが、音も無く崩れる。

「加奈りん……急に止まらないでよお」

「悪い。でも菖蒲、アレ……」

加奈りんがそつと白い人差し指を、自分の視線の先に添える。
菖蒲も鼻を押さえながら、神楽も菖蒲の背中に隠れながら、その指の先を見つめた。

アレは……。

三人の視線の先　深い闇に包まれた廊下の突き当たり。
そこには金色の二つの光が、床より少し上を浮いている。

「ひゃッおおお化け！」

後ろに居た神楽が、奇声を上げて身体を震わせた。

しかも菖蒲の脇腹を持ちながら顔を伏せるので、皮が引っ張られて痛い。

しかも加奈りんは加奈りんです。

「　　シヤアアアツ上等じゃねえか！」

“光”を捕まえようと、今にでも走りだそうとしているので冷静も何もない。

菖蒲は両腕を使い、二人の襟首を掴んだ。

「二人とも落ち着いてッ」

菖蒲の威厳ある怒声に、神楽と加奈りんがピタリと固まった。
そして、もう一度二つの光を見つめる。

アレは、お化けなんかじゃない。

そう。菖蒲は初めから気付いていた。
神楽と加奈りんも、びくびくと光を見つめる。

良く見れば金色の光は少しずつ近付いて来る。

“鈴の音”を伴い、近付いて来る。

一歩ずつ、ゆっくりと。

雲に隠れていた月がゆっくりと出てくる。

割れたガラス窓から光が差し込む。

『んにゃー』

首輪に付けられた鈴をりんと鳴らしながら、“赤毛の猫”が闇の
切れ目から現れた。

三人は改めて深いため息を吐く。

「なあんだ猫かよ」

「でも赤毛の猫って珍しいよねッ」

さっきまで震えていたくせに、神楽は気にする事なくしゃがみ込
み猫を呼んでいる。

加奈りんも苦笑しながらその隣に座った。

とりあえず良かった。

これで野犬だったらヤバい事になってたし。

まあその時は加奈りんが拳でなんとかかしてくるだろうが。だが、菖蒲はふと視線を感じて当たりを見渡す。

無論、加奈りんと神楽以外誰もいない。

おかしいなあ、と首を傾げつつ前を見て気付いた。

あの赤毛の猫が、じつと菖蒲を見ている。

何故だかは分からない。しかしその金色の瞳に吸い込まれてしま
う。

二人の話声が水に潜っているかのように遠くに聞こえ、その猫し
か視界に入らない。

『君の探している扉はこっちにあるよ』

透き通るような少年の声。

その言葉で、再び菖蒲は現実に引き戻される。

猫は、すつと菖蒲から視線を外した。

そして尻尾を悠々と降りかざし闇の中に戻っていく。

菖蒲は何が起きたのか分からぬまま、立ち尽くしていた。

今の声は……。

「おい菖蒲ッ何ぼけえとしてんだよ」

「置いて行っちゃうよお」

加奈りんと神楽が、少し先で叫んでいる。

「なあ。あの猫捕まえて、あたしらの下僕に」

「それは動物虐待ツツ」

神楽が加奈りんに珍しくツツコミを入れた。
しかし菖蒲は反応できない。
ずっと“あの声”が頭の中から離れない。

あの声は……。

夢で見た声と、同じだった。

あの猫が何者なのか。

あの声は何者なのか。 “扉”とは何か。

菖蒲はなんとなく分かっているのかもしいない。 自分は踏み込
んではいけない領域に

狂った運命の狭間に

もしくは決められた運命さだめに

誘われるまま

近付いている ……

ギイイイ……。

菖蒲達が、ゆっくりと音楽室の扉を開けた。

結局加奈りんの提案で赤毛の猫の後を追うことになり、今に至る。もちろん赤毛の猫は素早しっこく、追いかけても追いかけても追いつく事はなかった。

だが加奈りんは持ち前の瞬足で、廊下の端に猫を追い詰め、とうとう王手をかけた。と思ったが、そこは流石の猫である。

加奈りんが両手を上げた瞬間、さつと床下へと逃げ込んだのだ。もはや猫捕獲の為、くねくねと廊下を曲がったので戻ろうにもどこが昇降口なのかも分からない。

意地になって廊下を更に進んだのだ加奈りんだったが、偶然にも“音楽室”に辿り着いたのだ。

何だか……。

凄く嫌な予感がする。

菖蒲は不安を隠すかのように拳をぎゅっと握り閉める。

やはり何もかもがおかしい。昨日の夢と言い、旧校舎の扉の話と言い、赤毛の猫だって……。

まるでずっと昔から菖蒲が旧校舎に来る事を決められていたかのように、事が進み過ぎている。

こつなつたらさつさと“扉”を開けて帰ろう。

面倒な事に巻き込まれる前に早く……。

菖蒲は決意を固め、加奈りんの後ろに着いて行った。

視界に飛び込んで来た音楽室の内部は、想像以上に過去の原型を止めていなかった。

音楽室の要であるピアノの脚は折れ、椅子は綿が見えて黒ずんで

いる。

生徒用の椅子も机も埃を被り、至る所に転がっていた。

一見、老朽化によりボロボロになったように見えるがこの状態は少し違うように見えた。

そう。

それはまるで、『何者』かが、第三者が、部屋を荒らしたかのような。

「加奈りん、菖蒲。アレ見て見てッ」

神楽が机の下に転がっている白い欠片を指差した。

菖蒲は座り込みそっと欠片を手取る。

その少し上には同じ素材の取っ手が落ちていた。

「マグカップの、破片かな……」

しかも破片に重なるように液体が放射線状に広がっている。

しかもまだ濡れていて、蒸発していない。

ついさっきまで。

誰かがいたの？

薄気味悪さを覚え、菖蒲は欠片を床に戻す。

加奈りんもピアノの残骸部分で、何かを発見し菖蒲達に手招きしてきた。

「見ろよ、コレ」

加奈りんの冷たい声。

それはピアノの残骸を囲うように散らばる花。

色とりどりの美しい花。

しかしそれが今、踏み潰され、泥で汚れ、弱々しく床に散っている。

「ひどいッ」

神楽は思わず手で顔を覆った。

加奈りんは眉間に皺を寄せながら、花びらの一枚を手にとった。

「……まだ摘まれてからそんなに経ってない」

「ねえやっぱりおかしいよッ。誰もいないはずなのに花茶がこぼれてたり、花が散ってたり、それにあの猫だって！」

「ああ確かにおかしい。あたしらはここに来る途中誰ともすれ違っていない。それなのに何で、何で荒らされた跡が新しいんだ！」

加奈りんの拳がピアノに命中する。

ぐわんつと歪んだ音を発てて、ピアノの鍵盤が弾け飛んだ。

神楽は菖蒲の後ろに隠れながら、目を伏せる。

そうだ。

加奈りんは、花が荒らされるの凄く嫌いなんだ。

小学校の時　男子が花壇に悪戯して遊んでいたのを見た加奈りんが、再起不能になるまでボコボコに殴り大騒ぎになった事もあった。

しかし何でそんなに“花”にこだわるのか、加奈りんは言わない。聞いても、何も言ってくれない。

「許さねえ……。菖蒲、神楽ッ今すぐ旧校舎中をローラー作戦だ！」

「無茶苦茶だよッ見取図もないのにどうやって！」

「しらみ潰しに探せばなんとかなるッ」

「無理に決まってるでしょうがッ馬鹿言わないでさっさと帰る

……」

『早く逃げて』

小さな小さな女の子の声。

複数の声が重なり、音楽室中に響いてくる 否、菖蒲の脳内に
直接響いているのだ。

『貴方は狙われてる』

『アナタは殺される』

『だから逃げて』

『あなたは死んではいけない』

『“希望”の名を継いだ貴方は死んではいけない』

何、コレ……。

菖蒲は耳を押さえ周囲を見渡す。
しかし誰もいない。

加奈りんも神楽も、落ち着きの無い菖蒲を戸惑うように見つめるばかりだ。

『早く早く』

『奴らが来ちゃつよ』

『“絶望”の手下達がすぐそこに』

ガシヤアアアア

耳を裂くような音を発して、窓が一齐に割れた。
加奈りんは直ぐ様二人の前に立ち、身構える。

「えっ」

菖蒲は、思わず目を疑った。

闇のように黒い身体。

頭と手だけに詰められた鎧兜。

鋭い鉄鋼の爪。

闇夜に輝く、赤い瞳。

“刺客共”は、音楽室にひらりと舞い降りる。

菖蒲の顔が、極限にこわばった。

「逃げてッ」

言葉は自然と口から滑り落ちた。

加奈りんも相手が未知の生物と分かって、退却するしかない。

「ッんだよあいつら！」

だが“刺客”は一斉に三人へ飛びかかる。

喧騒の中、化け物の一体が菖蒲を襲いかかって来た。だが菖蒲は手元にあつた椅子を振り上げ殴り倒す。

どうやら黒い身体はすり抜けてしまつが、鎧の部分には打撃技が通じるらしい。

加奈りんも気付いたらしく得意の鉄拳で“奴ら”を撃退していた。

「きゃああッ」

突然響いた神楽の悲鳴に、菖蒲と加奈りんは振り向いた。

“刺客”の一体が、床に伏せる神楽に鋭い爪を振り上げる。

神楽ッ

間に合うか分からない。しかし、菖蒲は自分の首に下げていたカメラをそいつに投げた。

カメラはくるくる回りながら豪速で神楽の方へ飛んでいく。

そして見事“刺客”に命中し、神楽から何とか引きはなした。

逃げるなら今しか……！

「神楽、菖蒲ッ早く！」

加奈りんが、二人の手を引いた。

他の“刺客”は不気味に身体を揺らしながら起き上がる。いずれ追い付かれると思ったが、とりあえず逃げるしかない。

菖蒲は加奈りに手を引かれるまま、引き戸を開けて音楽室を出た。

“音楽室を出た”はずだった。

しかし、そこに廊下はない。

薄暗く狭い部屋にあるのは大小様々な楽器ケースと、『扉』。息を切らしながら、加奈りんは硬直している。

「おい……。な、んで教室から出てねえんだ」

何故教室を出ていないのか。

しかし、そのからくりにいち早く気付いたのは神楽だった。

「もしかして、加奈ちゃん……入り口間違えた？」

暫しの沈黙。

確か『開かずの扉』がある楽器庫は音楽室とつながっていると聞いていた。つまり恐怖による焦りから加奈りんも少なからずプレ

ツシャーを感じていたとしたら……。

まさか。

加奈りんは、音楽室入口のドアと。

『楽器庫のドア』を勘違いした？

三人の血の気が一斉に引く。

同時に楽器庫の扉を激しく叩かれた。

“ 奴ら ” だ。

“ 奴ら ” が追って来たのだ。

菖蒲は逃げ道がないか周囲を確認するが窓も換気口もない。完全なる袋の鼠だ。

「 加奈りんどうするのッ 」

「 あたしに聞くなッ 」

菖蒲と加奈りんが口論している間にも、扉がぎしぎしと軋む。すると神楽は楽器ケースを楽器庫の扉の前に積みながら二人を見た。

「 『開かずの扉』を、開けるしか……ない 」

逃げ道がないなら、自分で確保するしかない。

だが菖蒲は固まる。

薄々気付いていたのかもしれない。

“ 出口がない ”、その時からもう避けられないと……。

でも……。

菖蒲には『開かず扉』を開ける気にはなれなかった。

『扉』を開けたら、もう何もかもが手遅れになる気がして、開ける決心がつかない。

だが、加奈りんは動き出していた。

取っ手のない、中央から左右に開く型の『扉』。

その『扉』を、ある力全てを送り込み押し出す。

「菖蒲ッ手伝え！」

「加奈りん……」

「早くッ」

腕力自慢の加奈りんですら『開かず扉』は開かない。

足はずりずりと後ろに下がり、しまいには床に伏せてしまった。

菖蒲は、黙って目を反らす。

わ、私は……。

「菖蒲えッ」

神楽が楽器庫の入口を押さえながら叫ぶ。

どんつと一定の速さで叩かれる度に、入口の前に置いた楽器ケースが少しずつずれていく。

突破されるのは時間の問題だ。

「あ、やめッ！」

加奈りんが『開かずの扉』を押しながら、菖蒲を呼ぶ。

張り詰めた空気。二人の声が、夢の中の声が、菖蒲の中で混濁する。

『君にしか出来ないんだ』

「　　っ！」

菖蒲は『開かずの扉』に飛びかかった。
助かる為には『扉』に賭けるしかない。
何かが起きたら、三人で乗り切れればいい。

「ひ、開けええッ」

だが、加奈りんと二人がかりで押しても扉は開かない。
むしろ神楽の押さえている準備室の入口の方が開きかかっている。

なんだよッ。

私が押したって……。

私を呼んだくせに……。

『扉』なんか開かないじゃないかッ！

涙すらこぼれそうだった。

手は爪が剥げはじめ、激痛を伴いながら血が流れている。

それでも諦める訳にはいかない。

自分に出来る事はこれしかない。

しかし、限界はすぐそこまで来ていた。

緊迫する準備室。

弾け飛ぶ楽器ケース。

入口に食い込む鋭い爪。

その切れ目から覗く、赤い瞳。

早く早くッ！

菖蒲は涙目になりながら、尚も『開かずの扉』を押し続けた。

手の平でにじんだ血が『扉』に滴っていく。

血がゆっくりと錆びた溝を通り、下へ下へと流れていく。

その過程で、神楽が楽器ケースごと入口から弾き飛ばされた。

加奈りんの手の骨が軋んだ。

涙なのか汗なのか分からない雫が、菖蒲の頬を伝う。

それでも信じるしかない。

菖蒲達は祈るしかない。

“奇跡”を、願うしか……。

お願い、開いて……。

菖蒲の血が、『開かずの扉』の中央にある小さな窪みに入った。

『血液認証。ほぼ同成分と判断。“アイリス”の血液と承認します』

機械的な声。

菖蒲の顔を照らす優しい光。

『開かずの扉』が、輝きだす。

「と、扉が」

『ゲートポイント。 19・ホーリタウン。アイリスと同伴一名、合計二名の通行確認』

隣に立つ加奈りんも戸惑いを隠せず、訳の分からない言葉を聞くばかり。

『緊急事態時、緊急用 32・ゲートポイントを使用。侵入者の場合令状9条に基づきゲート爆破処置作動、爆破レベル“テラ”。設定変更なし。整備不良なし ゲートを開きます』

何が起きたのか分からなかった。

菖蒲の身体がゆっくりと前に傾く。

その視界の中で、『開かずの扉』が左右に開いていくのが分かった。

「菖蒲ええッ」

冬の陽射しのような優しい光。

扉が開くにつれて光が楽器庫いっぱい輝く。

「アッ」

呼ばれて気付いた。

菖蒲の身体は『扉の中』へ落ちていく。

菖蒲は首を後ろへねじる。

加奈りんが必死に手を伸ばす。

一瞬の出来事なのに、二人にはとても長く感じた。

菖蒲は手を伸ばす。

友人に手を伸ばす。

加奈りんも扉の中に手を入れようと更に伸ばす。

後数センチ。

後数秒。

後一呼吸。

しかし次の瞬間、加奈りんの手が見えない何かに弾かれた。

加奈りんッ

二人の手が、再び離れていく。

菖蒲の身体が、光へ落ちていく。

加奈りんが叫ぶ。

その後ろには、“奴ら”がいる。

戻れない。

帰れない。

二人が、危ない。

何で私だけが。

「神楽あッ加奈あああ！」

光の中。

菖蒲の涙ながらの咆吼が。

長年閉ざされていた『扉』を揺らす
……。

カード3：不思議の国（前書き）

ご愛読ありがとうございます。

新連載して直後で誠に申し訳ありませんが、暫くお休みを頂きたい
と思います。

理由としては今週に控えた中間試験・各種検定の試験が控えている
為です。

しかしながら今週中にもう一話更新してからお休みを頂こうと思
いますので、気長にお付き合い下さい。

では長くなりましたが、物語へ ……

カード3：不思議の国

辺り一面に広がる色彩の絨毯^{じゅうたん}。

花々の溢れる生命に輝く絨毯。

風が吹くたびにサラリと波打ち、緑色のなだらかな模様を打ち出す絨毯。

そして、大自然の花吹雪中で聞こえる“羽ばたき”。

よしッ誰もいねえぞ。

天使のような大きな羽を持った少年が、空から舞い降りて来る。

そう。“舞い降りる”と言うのも彼の背中に白く大きな翼が生えているのだ。

少年はばさりと羽をたたみ、自然の絨毯の上に着地する。

ここは少年の『秘密の場所』。

もちろん、自然は皆のものだ。一人じめにしようなんて思っていない。

しかし、“この場所”の空気、青空、季節で変わる景色が少年にとって何よりも好きだった。

だから初めの内は、一ヶ月に一回のペースで。

しかし年を重ねる度に、一人になる時間が欲しくなり、暇があれば来るようになっていた。

だから、今日もまたやって来る。

街は、お祭りの準備で色々と騒がしかったから。

やっぱりここが一番落ち着くなあ……。

ま、暫くここで昼寝していてもバレやしねえだろう。

少年は一人頷くと、ごろんつと横になった。
同時に花びらが舞い、頬や服にくつついた。
風が音をたてて草花を揺らしていく。
大きく揺れたり、小さく揺れたり。その繰り返し。
少年は雲の流れを見ながら、花の歌声を聞いていた。

いい天気だなあ……。

このまま草花と同化出来たらどんなに心地よいだろう。
少年は大きな欠伸をし、瞳を閉じる。
今はまだ昼。祭りは夜に始まる。
自分一人いないくらいでも準備はちゃんと出来る。
だから風に誘われるまま、眠りに落ちようとした
……。

……ゴオオオツ

少年は思わず眉をよせる。

何だ？

風の音がおかしい……。

まるで落下物が迫って来るような抵抗音。
しかし“同族”で空から落ちる馬鹿はいない。
どうせ子供が遊んでいるのだからつと寝返りをうつ。

……アあああッ

だが、再び聞こえた“音”。
否 “声”。

少年は横を向きながら目を開く。

おい。

……きゃあああッ

これは明らかに悲鳴だ。

しかも声はだんだん大きく膨らみ……

「きゃあああッ」

完全に人の声と分かるくらいまで接近。

これは近い。

何かが落ちてくる。

今、自分の上に落ちてくる。

おいおいおいッ！

少年は回避しようとして起き上がる。

しかし起き上がった時には、もう遅い。

「うあああッ」

少年を覆う黒い影。

上を見上げれば目まで合ってしまった。

涙目で空から降って来る少女と。

これから全ての運命を握る少女と……

。

「ちよ、待っ　いぎゃあああ！」

べちや。

少女の身体で少年の顔面が潰される。
その衝撃で周囲の花びがひらりと待った。
その衝撃で鼻がボキと嫌な音がした。
ついでに首もゴキと嫌な音がした。

な、なんでこうなる。

びくびくと震えていたが、やがて力尽きて動かなくなった。
口からは大量のあわ。
鼻からは大量の血。

『バルト・スカルファーズ』
“生涯一番の厄年”

「あたた……」

菖蒲は、頭を抱えながらゆっくりと起き上がった。
未だぼやける視界をこらし、周囲を見渡す。

ここは……？

見渡す限りの草原 否、“花畑”と言った方がふさわしい。

爽やかな清風。

香り豊かな花々。

終わりの見えない青い空。

この風景に誰もが天国か夢だと思っただろう。

もちろん、菖蒲は夢であって欲しいの願った。

しかし、“あの時”爪のはげた指が、今更になってズキズキと痛みだす。

同時に“痛い”という事は夢ではないことが分かる。

ついでに“痛い”と感ずるといふ事は死んでもいない。

ゆ、夢じゃない。

って、私はあれからどうなったんだろう。

確か『開かずの扉』が開き出し、菖蒲だけが扉の向こうへ落ちてしまった。

ひたすら光をさ迷い、気付いたら菖蒲は青空を急降下していた。

本気で焦って、もがいて、無駄だろうが手を羽のようにばたつかせた。

しかし、もう駄目だと諦めかけた瞬間、丁度何かがクッションになっただけ……。

「あ、あれ？」

不意に覚えた違和感。

わ、私。何の上に着地して……。

ぬつ。スカートの下から現れた手。

その手は菖蒲の足を握る。

「一つ。貴様は俺の昼寝を邪魔した」

足元から聞こえる若い男の声。

「二つ。貴様は俺の顔にスカイダイブしてきた」

ガタガタと震え出す菖蒲。

不気味な寒気が、背中を這い上る。

「そして三つッ」

菖蒲の足がゆっくりと横にずらされた。

下を向けば、鼻血を大量に流す、銀髪短髪頭が菖蒲を睨みつけている。

もはや菖蒲の恐怖は限界にまで膨れ上がっていた。

「気が付いてから一言も謝罪しねえで、何を呑気に回想してやが……」

「キヤアアアツ痴漢！」

まさに秒殺。

バルトが言い終える前に加奈りん直伝のキックが顔面に食い込む。
いきなりの奇襲に、バルトは防御すら出来ずに ……。

「おぎゃあああすッ！」

声を上げて花畑を転がり、向かいの木に激突した。

菖蒲はガタガタと震え、目の前に転がる屍を見つめる。

本人的には立派な自己防衛だったらしい。

「おいてめえ待てこんにやる、さっきの蹴りの必要性いらねえだろッしかも何が痴漢だ！」

「私のスカートの下で寝てたじゃないッ」

「馬鹿言っつなッてめえが俺を踏んでたから動けなかつたんだよ！」

「鼻血出してたくせに！」

「それはてめえが俺の顔にダイブしたからだああッッ」

にぎぎ。お互いが息を切らしながら、睨み合う。

傍らで聞いていれば何とも馬鹿らしい会話だが、今の彼らにはそんな事も気にしている場合もない。

すると菖蒲は、首を傾げつつ、ずびしと指を差した。

てか……。

「あんた誰！」

「そりゃ、こっちの台詞だボケえッ」

バルトは呼吸を忘れるくらい大きな声で叫ぶ。
命の恩人に向かつて、ある意味失礼な女である。
しかし菖蒲は全く悪びる様子もなく、あからさまに不快を露にした。

「なんか……良く見ると目つき悪いし、怒鳴ってばっかで変な人だね」

「てめえに言われたかねえよツてかお前誰だ、名を名乗れ名を！」
しかしその問いに菖蒲は更に顔をしかめる。

「常識的にあなたから聞いてきたんだから、そっちから名乗るのが普通でしょ」

常識よ常識。菖蒲は腕を組み、ふんと鼻息を荒げた。
元を正せば菖蒲から『あなた誰！』と尋ねたくせに、改めて失礼な女だ。

バルトは何か言い返そうとしたが、ため息を吐きつつ、胸ポケットから銀の塊を取り出した。
片翼のバッチだ。

「……くそ。俺は治安課所属の“バルト・スカルフアーザ”。種族は“鳥”だ」

治安課？

種族………つて何。

思わず頭にハテナを浮かべる菖蒲。　しかし直ぐにバルトの言っている事を理解する。

だって“それ”は、彼の背中に生えていた。

二人の間に突風が吹く。

花びらが舞う。

木の葉が舞う。

そして

“白き羽”が、菖蒲の視界でひらひらと踊る。

ああ……ッ。

目の前で、ばさりと広がる白い翼。

バルトの背中から大きな翼が、風を受け、今にも飛び出しそうな程に羽ばたきだす。

は、羽が……。

開いた口が塞がらないとはまさにこの事。

菖蒲は震える指でバルトの翼を指差す。

「何だお前。“鳥族”も知らねえの？」

バルトは翼をばたつかせながら鼻で笑う。

しかし菖蒲には、ただ彼を指差す事しか出来ない。

「ただだって、はは羽が」

「俺達“鳥族”は、“鳥の血”を継いだ者だ。なんつーか、人間で

もないし、鳥でもない。勿論ハーフでもない」

人間でも、鳥でも、ハーフでもない存在。

「例えば『犬』が『犬』のように、『人間』が『人間』のように、俺達も『鳥族』が『鳥族』のように、元からの種族として生きていく」

つまり、生物図鑑を開く。

“タ行”で探していく。

そして“ト”の蘭に、『鳥族』という項目があるということだ。

「勿論、鳥族の他にも“花族”、“魚族”、“猫族”とかたくさんいるけどな」

加えて、この一言に菖蒲は目昧すら覚えた。

あまりに飛躍した話について行けない菖蒲である。

「でも、今まで良く人間に見つからずに、生活出来たね」

しかしそんな菖蒲にバルトは、首を傾げるばかり。

「はあ？ 何言ってるの」

「だって、人間に見つかったらマスコミに騒がれるし、研究者だつて出てくるかもしれないし……」

確かに一理ある。

人間に見つかれば、ただでは済まない。

マスコミは大きく取り上げ、研究者も我は我よとたかってくるだ

ろつ。

それはまさにハイエナの、素早く、しつこく、残酷に獲物を喰つ
様のように。

しかしバルトは呆然と菖蒲を見てきた。

「だから何言っただ」

その視線はまさに常識のない奴を見るように……。
呆け始めた奴を見るように……。
しかもその口から発せられた言葉はあまりに衝撃的で。

『見つかるも何も……。人間なんてこの国にいる訳ねえだろ』

菖蒲は言葉を見失う。
頭が真っ白になる。

「は、ははは……」

もはや笑うしか心の逃げ道はない。
菖蒲は静かに首を横に振る。

「そ、そんなはずないっ。ただって、私が」

私は、“人間”だもん。

「でも俺、“人間”なんておとぎ話の中でしか聞いた事ないしい」
そう言いながら、バルトは首をすくめる。

まるで自分に当たられても困る、とでも言っているかのようだ。

じ、じゃあ……。

仮に人間がいなかったら。

「“ここ”は、どこの……」

菖蒲にとって今一番に重い問い。

しかしバルトにしてみたら、完全に馬鹿にしか見えない。

実際に菖蒲だって、日本で日本人が『此所ドコデスカ?』なんて聞いたら、頭のネジが一本抜けてないかと疑うだろう。

「……お前、頭大丈夫かよ。」

現に、バルトにはそう見られている。

でも、バルトは付き合ってくれた。

ちゃんと、答えてくれた。

『ここは“不思議の国”。色彩の街“ホーリータウン”だ』

菖蒲には、とても残酷な真実だったが……。

菖蒲達が立ち尽くす花畑の上。
そこから幾分も離れていない木の上に一人の少年が座っている。
赤毛で、頭には猫耳が付いており、お尻には長い尻尾まで。

「よし。とりあはず君をここに連れてくるのは成功したね」

少年は一人微笑む。

「まさか“デイスファイア”に邪魔されるとは予想外だったけど……」

少年は鳥族と話す菖蒲を遠目で見つめた。

やはり“似ている”。

もはや同一人物と言っても過言ではないように。

「……君には“アイリス”の名を継ぐ資格がある」

その目は、もう菖蒲を見ていない。

彼の意識は知らずと遠い昔の、昨日の事のような記憶の中に沈んでいく。

その中で“少女”の名を呼ぶと、いつも笑って答えてくれる。

『じゃあ貴方は“ノーティ”でどう？』

名のない自分に、名をくれた。

『“赤毛のノーティ”……悪戯好きな貴方にぴったり』

“少女”はまた笑った。
初めて見た、素直で素敵な笑顔。
その笑顔を守りたかったのに……。
ずっと傍にいて欲しかったのに。

「僕は、もう戻れない」

ぎりつと、歯を噛み締め記憶を打ち消す。
今は過去にとらわれている場合じゃない。
前を見て、自分に出来る事をするだけ。

「さあて、もう一押しするかなあ」

木の上で、少年は大きく伸びた。
そして木から飛び降りようとするが、ぴたりと立ち止まる。
彼自身、いきなり菖蒲を一般から引き抜いて悪いとは思っている。
しかし菖蒲にしか出来ないのだ。
“アイリス”の名を継ぐ、菖蒲にしか……。

「本当に……。僕一人じゃ、何も出来ないんだ」

少年は悲しみを振り払うかのように尻尾を振り上げ、そのまま地面に着地する。

そしてゆっくりと歩きだした。
その背中に全てを抱え歩みだす。

過去を背負いながら

“名前”を背負いながら

“アイリス”への想いを、隠しながら ……。
もう、振り返らないと決意を固めて ……。

カード4：出会いの街

砂利をざくざくと踏みしめ、黙々と歩み進める二人の男女。

男の方は、女の身長より多少大きいだけでそんなに変わらない。

しかしこの男　実は“鳥族”とかいう民で、自分の身長程の大きな翼がある。

だったら何故飛べるのに地面を歩いているかというところ、相手の女には“翼”が無い。

まさか自分一人だけぴゅーと、飛んで街に帰る訳にも行かず、仕方なく歩いて帰っている訳だ。

うーむ。

だが、女は“人間”。翼など持っていた方がおかしい訳で
…

う、うむ。

それに気付かない男　バルト・スカルフアーザは大変頭を悩ませていた。

「なあ、お前何族なんだよ」

女は目を伏せ、黙り込む。

さつきからずっとこの繰り返し。何を聞いても、黙り込み、目を合わせない。

初めはバルトへ、何かとつかかて来たのに、今ではすっかり大人しい。

どうにもこうついう空気は吸いなれねえ……。

バルトは目を泳がせ、困ったようにポリポリと頭を搔く。

「じゃあどっから来たんだよ、空から落ちて来るなんて尋常じゃねえだろ。両親とか……友達は近くにいないのか」

「う……う……」

気付けば、女は涙目。

鼻をすすりながら、必死に溢れそうになる感情に堪えていた。

この様子に、バルトは目玉が飛び出しそうになる。

「うわあああツわわ分かったから泣くんじゃねえ！俺が泣かしたみたいだろうが」

まあ俺が泣かしたんだけどさああ！

柄にもなくオロオロと戸惑うバルト。

両手を振り上げ、女の周りを回っている姿はなんとも怪しい。

ああ……やっぱり今年は厄年だあ。

つーか、泣きてえのこっちだし。

何とか落ち着きを取り戻した女の背中を叩き、バルトは大きくため息を吐いた。

改めて女の外観を見ると、大人ぼさ漂う横顔と長く清い髪からは十代後半の女性にしか見えない。

自分とほぼ同年代ではないだろうか。
しかも風が吹くたび、長い髪からは甘い香りが漂う。
その度に、バルトは思わずドキッとして、目を反した。

何ときめいてんだ俺ッ

相手は何を考えてるか分からない馬鹿女だぞ！

しかし、ここでバルトは気付いた。

“何を考えているのか分からない”

もし仮に、本人自身が“何も分かってない”としたら……。

いや、そんな馬鹿な。

でも……。

根拠ならある。

彼女は何族かも、何処から来たのかも、両親も、友人の事さえ教えてくれない。

しかも鳥族の翼を初めて見たような、あの反応。

この世界で“鳥族”を見た事が無いという人が居るとは考えられない。

まさか、この女……。

バルトはごくりと唾を飲んだ。

“記憶喪失”ッ！

全く事実と反しているが、ここまで思考を巡らせた彼に拍手を送ってやりたい。

だが、仮に記憶喪失だとしたら（バルトの勝手な思い込みだが）、今後どうしたら良いのか分からない。

現に何を覚えているのか、全く検討もつかないのだから。

そういえば……。

バルトは、まだこの女の名前を知らない事に気付く。面倒くさそうに頬を掻きながら、小柄な肩を掴んだ。急に止められた女は、目をぱちぱちさせる。

「えーと……。お、お前名前は？ そういやまだ聞いて無かったよな」

すると女は静かにため息を吐いた。

って、何でため息吐くんだよ！

「だって俺は嫌だぞ。なんつーか、女の子を『お前』とか呼ぶとか……偉そうだし」

「……自覚合つたなら呼ぶなよ」

「ああ、すみません　ってテメエ今なんか言っただろツ」

バルトが拳を振り上げると、慣れた様子で女は素早くかわす。そして、二歩先まで距離を置いて呟いた。

「菖蒲」

微かに女は笑っていた。

バルトが初めて見た、菖蒲の笑顔だった。
一瞬頭が真っ白になり、バルトは思わず硬直する。

「……アヤメ？ お前アヤメって名前なのか」

女は 菖蒲は、何も答えずにただ歩いていく。
チェックのスカートが、風でひらりと揺れる。

アヤメ……。

バルトは、ハッと我に帰った。
そして、彼女の正体に気付いた。

分かったぞッ。

アイツは、“花族”だ！

再び自分勝手な推理勃発。

花族は何かと“花の名前”をつけたがる。
花族ならば翼が無くても納得できるしな。

一人頷き、我ながら見事な推理力に酔いしれる。

しかし、全く事実の反している事に気付かない姿は、何とも哀れ
だ。

すると菖蒲が街の入り口で立ち止まっている。

「 ねえ」

それは、まさに不審者を見るような呆れた顔。
そして首を傾げながら、憎たらしい一言を吐き出す。

「一人でブツブツ言ってるって怪しいよ、えーと……“ベルト”君？」

“ベルト君”？

「……て、俺は“ベルト”じゃねえッ“ベルト”だあ！」

バルトは怒鳴りながら、全力で菖蒲に駆けていく。

菖蒲は直ぐ様、街の中へ駆け込んだ。

「あれ？ ベルトじゃ無かったけ」

「バルトだあぁコラあー！」

「あつ“タルト君”か」

「テメエわざとだろっつー！」

バルトは怒りに身を任せ、足では菖蒲に追い付けないので翼を使った。

菖蒲が気付き、反則だのと文句を言ってくるがお互い様だ。

二人の怒声が、ぎゃあぎゃああと街中に響き渡る。

バルトはこの時気付かなかった。

色彩の街、『ホーリータウン』で。

祭りを控えた、『ホーリータウン』で

『出会い広がる、始まりの街』で……。

皆の物語が一齐に動きだす事に

「うわぁ……！」

街に入った菖蒲は、思わず目を輝かせた。

西洋風の建造物。

溢れるばかりの活気と、花の香り。

そして特に、菖蒲の目を奪ったのが

街の中心で弧を描く二段噴水。

その噴水の周りに縁取られた七色のチューリップ。

水しぶきが花びらにくつつき、雫がつるりと滑り落ちた。

これを美しいと言わずになんと言っただろう。

キレイ……。

加奈りんや神楽にも、見せてやりたかったなあ。

呆然と噴水に見取れていると、いきなり肩を叩かれた。

「や、やっと追い付いた」

バルトだった。

ぜえぜえと息を切らしながら、羽をたたむ。

飛んでいても疲れるんだなあと、菖蒲はある意味感心した。

「ねえ。この噴水って何？」

「ああ？ これはホーリータウン観光名所『レインボーティア』だ」

『レインボーティア』 直訳すれば『虹の涙』。

どういう由来なのかバルトに尋ねようとした所、彼が先に答えてくれた。

「今から20年以上前 『虹の使者』がこの国に現れて“邪”を取り除いてくれたんだ。その時に、二度と“邪”がホーリータウンに訪れぬよう自分の涙を噴水に変えた。以来、ホーリータウンは平和を維持してるっていうおとぎ話さ」

菖蒲は驚いたようにバルトを振り返る。

「おとぎ話なの？」

「だって俺は信じてねえし。だいたい涙を噴水にするって、そいつ脱水症状で死ぬから」

夢を壊すな夢を！

ふんつと鼻で笑う馬鹿鳥に、菖蒲は殺意さえ覚えた。

だいたい観光名所には、そういう言い伝えが無い方が珍しい。
まあ菖蒲がバルトの立場だったら同じようにツツコミを入れるだろうが。

菖蒲は笑みを溢しつつ、悲しげにため息をもらした。

街に来たら何か分かるかと思っただが、見かける人は全て鳥族などの人間界には存在しないもの。

また落ち込みそうになるが、バルトにはこれ以上心配をかけては
いられない。

彼は彼なりに、見知らぬ自分に気を使ってくれていたのを、菖蒲
は気付いていたから。

「何だか元気ないねえ」

凶星を指すような一言。

「そんな事ない……」

「だって寂しそうだよ？」

「……寂しくなんかない」

「寂しく無かったら、そんな顔しないよ」

「バルトしつこい！」

涙を堪えながら、隣にいるバルトを睨む
が、バルトはきよと
んとしていた。

「はぁ？何言ってるのアヤメ」

「な、何……って。今なんか」

振り返ろうとして、頬に人差し指がむにゅっと刺さる。

「わぁいッ引つかかったぁ！」

同年代の、男の子だろうか。

茶髪に赤い瞳。

前髪を真ん中で分けて、眼鏡をかけている。

そこまでは普通の子。

なのに。

「バルトお。なあに祭りの準備サボってデートしてんのさ」

彼の耳は、ウサギだった。

「う、ううウサ」

「あ、どうもお。 “ウサギ族” の『グリフ・スティーヴン』と申します」

グリフと名乗る少年は、くるりと手を前で回しながら、華麗にお辞儀する。

隣のバルトは、ケツと唾を飛ばすが。

「……何でお前がいんだよ」

「あらら。ボクは君に “情報” を教えに来ただけさ。そしたら女の子とデート中で……」

「デートじゃねえよ！ てか、訳ありでさ……」

がしつと、グリフの肩を組み道端に移動するバルト。
何やら密談らしい。

菖蒲は自分の事を言われていると気付き、困ったように目を反らした。

「実は空から落ちてきたんだよ」

「君がかい？」

「ちげえよ。あの女だ」

ブツブツと密談が始まってから、約30秒が経過。
するとグリフが振り返った。

ずんずんと歩みを進め、菖蒲の手を握る。

突然の事に驚き、身を退こうとするがグリフの手がそれを許さない。
い。

菖蒲は、ピクピクと眉を痙攣させた。

「あ、あの……」

「アヤメちゃん。辛かったね」

ぐしつ。涙をすすするグリフ。

「ああ君は何も言わなくて良い。ボクはちゃんと分かってるから」

「あああの……」

「辛いと思う。バルトが呑気に昼寝をしている間、君は涙を流して助けを呼んでいたんだ」

「え、えーと」

「それなのに君は悲しみを忘れ、忘れた事さえ忘れている。でも決して弱音を吐かない君。そんな君がボクは大好きなんだああ！」

初対面にして、こんな馬鹿げた告白なんて受けた事がない。

あいつ……。

何言っただよ。

反射的にバルトを睨むが、俺は知らないとはかりに首を振っていた。

「まあグリフはお節介好きだけど、悪い奴じゃないから」

でも、変わった人（？）だよ……。

菖蒲は、声ならぬ声でツッコむ。

グリフはハンカチで鼻をかむと、再びバルトに向き直った。

「事情はだいたい分かったよバルト」

「おーそりゃ良かったな」

いや、全然分かってない……。

「あ、そういえば」

同時に三人を覆う黒い影。
ばさばさと羽ばたきが聞こえてくる。

何？

「君の親父さんがねえ」

グリフが、満面の笑みで真上を指差した。
何やら声が聞こえる。

男の人で、何かを叫んでいる。

「ばあるうとおお」

バルトは本能的に青ざめていた。

何か、落ちて来てない？

嫌な予感がした菖蒲は真上を見上げる。
逆光で見えにくいのが、翼の生えた男がこちらに急降下してくる。
銀髪の男が、今バルトの元に向かって落ちてくる ……。
バルトはがくがくと震えながら、空を見上げた。

「バああルううト！」

鳥族必殺！

『スカイダイブハグ』。

「い、いや ギニャアアアツ！」

バルトが落下の衝撃をまともに喰らい、砂埃に包まれる。その風圧で菖蒲のスカートが、ぶわりと捲り上がる。グリフは相変わらず笑っていた。

街の人々も何事かと、ざわざわと顔を出したり、見に来たり。そして砂埃が晴れて来ると、顔を真っ青にしたバルトが……。

「バルトオ。父さん心配したんだぞお〜全く困ったちゃんだなあ」

鳥族親父に抱きしめられていた。

菖蒲はただ呆然とするしかない。

隣のウサギ男は、呑気に手を叩く。

「そうそう。君の親父さんが探してたんだよ！」

今更遅い“情報”を、屍状態のバルトに提供。 どうやら落下し

て来た男は、バルトの父親らしく見ての通り親バカ。

意識を取り戻したバルトは、慌てて父親を引き離れた。

「 テメエ、俺を殺す気か！」

「何を言うか。愛を確かめ合うにはアレぐらい過激な抱擁が」

「息子を殺しはぐる抱擁のどこが愛なんだよコラア！」

菖蒲もバルトに落ちて来た身なので、人の事は言えないが静かに頷く。

しかも、この親父さん。天然なんだが素なのか全く詠めない。

まあこんな父親なら、必然的に口うるさい息子に育っても周囲は文句も言えないはずだ。

「しかもねえ。バルトの親父さんは、ホーリータウン町長でもあるんだよ」

グリフが欠伸をしながら呟いた。

菖蒲は思わず目を見開く。

「町長って……あのおじさんが？」

「うん。やっぱり見えないよね」

見えないって言うか……。

あんな人で良く街が潰れないなあ。

さりげなく失礼な事を考えるが、それも事実だろう。あの親バカっぷりに、何故誰も指摘しないのだろうか。いい加減、指摘してやるのも優しさだと思うのだが。

「じゃ、ホラ。父さんと一緒に祭りの準備をしようじゃないか」

「ちょ……待ってって」

手を引こうと伸ばしてくるが、バルトは直ぐ様弾いた。

そして菖蒲とグリフの所に戻ってくる。

「俺はこれからコイツらと“百合”の所に行く」

百合とは誰なのかも分からないが、初耳な発言にグリフはギョッと目を見開く。

「え。そんな話聞いて　ぐはッ」

反論する前にバルトの肘がみぞに入る。
しかしバルトの父は、じっと三人を見つめていた。

「だから、俺とグリフは祭りの準備は出来ねえのッ」

「な、何でボクまで……」

自信満々に菖蒲とグリフの肩を組むバルト。

するとバルトの父は、静かに歩みよる。

微かに顔をこわばらせながら、震えを堪えながら。

「え」

「息子ではなく、菖蒲の元へ。」

「君……名前は？」

菖蒲は、バルトの父のただならぬ様子に怯えながら、震えた声で答える。

「あ、菖蒲です」

「ア……ヤメ？」

バルトの父の表情が穏やかになる。

誰かと勘違いでもしていたのだろうか。

ため息を吐くと同時に、バルトが慌てて二人の間に入った。

「こ、この子は花族の子で。最近引越してきたらしくてさ……なあグリフ！」

「そうそうッ」

グリフまでが、菖蒲をバルトの父から引き離す。

なんか知らないけど。

私、『花族の人』って事にされてる……。

まあバルト達は、菖蒲をフォローしてくれているのだから、自分は下手に話さない方が良さだろう。

バルトの父は、菖蒲に微笑み直した。

「私はこの街の町長、『ヘレン・スカルフアーザ』。困った事があつたらいつでも頼っておくれ」

ヘレンは手を差し出し、菖蒲に握手を求める。菖蒲は何となく戸惑っていたが、ぎこちなく手を伸ばした。

ヘレンの温かく、大きな手。

うらやましいくらいの父親の手が、菖蒲の小さな手を包み込む。

「さあて。私は仕事に戻らねばいけない」

握手を外し、ヘレンは苦笑いしながら、腕時計を眺める。どうせ仕事を抜け出して来たんだろう。

「バルト、日が暮れるまでには噴水前に戻るんだぞ」

「分かってるって。祭りが始まる前には戻るぞ」

では、よろしい。ヘレンは翼を広げる。
バルトよりも大きな翼だった。
そして、去り際に小さく呟く。

「アヤメちゃんを、ちゃんと守るんだぞ……」

バルトは良く聞こえなかったらしく、目を細めた。

「んあ？ なんだ聞こえねえよ」

「聞こえなかったなら良いんだ。じゃあ祭りに遅れるなよッ」

いきなり現れて、好き放題やって、いきなり帰る。

まさに台風のような不思議な人。

バルトはそんな父親の背中を見上げ、首を傾げた。

なんだか、いつもと雰囲気違っていたのだろうか。

私には、分からないけど……。

でも、と思う。

ヘレンが近寄って来た時に。

あのこわばった表情が。

何か面影を探すような眼差しが。

ちよっぴり、怖かった ……

「……似ている」

大きな空の中、ヘレンの聲がぼとりと落ちる。彼の頭の中に蘇るのは、数十年前に現れた“友人の姿”。
顔も、声も、身長も、全てが似ている。
しかし彼女は、もうここにはいない。
居たとしても、自分と同年代だ。
四十歳は完全に過ぎている。

だから。

「考え過ぎ、か」

ヘレンは微かに苦笑しながら、翼を少し傾けた。
模型のような小さな街は、再び大きくなっていく。
ヘレンが着地するのは、街の南にある町役場。まだやっていない仕事が山ほどある。
風を受けながら、下降して行く。景色を受け流しながら下降していく。
しかし、何かがおかしい。

「なんだ……？」

役場が見えて来たと同時に、周囲を囲む“黒い塊”。
銀色の鎧兜を被った、謎の集団。
落下すればするほどに、赤い瞳まで見えてくる。

「まさか」

そんな馬鹿な、奴らは“滅んだはず”。
目の前の現実が信じられず、背筋に気味の悪い寒気が走る。
二十年前以上の記憶が、再び悪夢となって蘇る。
だから気付かなかった。
迫り来る、“奴ら”に。

「なッ」

宙に飛び上がった“鎧の使者”。

赤い瞳をぎらつかせ、今、目の前にいる。

ヘレンの、目の前にいる。

表情こそ分らないが、にたりと笑ったように見えた。

鋭い鋼の爪が、大きく振り上げられる。

避けきれない　　ッ

シュッ

不思議の国のアイリス

次の瞬間

。

青空に、赤き羽がひらひらと舞い散った……。

カード4：出会いの街（後書き）

更新遅れて申し訳ありませんでした。

予告通り、お休みを頂きたいと思えます。

改めまして、ご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした。

カード5：夕暮れの街（前書き）

約一ヶ月近いお休みを頂いてしまっ
て申し訳ありませんでした。
今後も定期的に更新していくので、
気長にお付き合い下さいませ。

カード5：夕暮れの街

「ねえ、“祭り”って何？」

ととととと街中を歩きながら、菖蒲は振り向く。

後ろには、相変わらずぶすつとしているバルトと、塀の上を器用に渡るグリフがいた。

この街には、やはり“人”が居ないが、動物耳の人達がせつせつと機材を運んでいる。

バルトはその内の一人を避けると、菖蒲の顔を覗き込んで来た。

「あれ。まだ言って無かったっけ」

「聞いてないよ。何か街の人も忙しそうだし、グリフ君やベルトも“祭り”が……なんとかかんたらって言ってたじゃない？」

「待てこら。だから俺は“ベルト”じゃねえ、“バルト”だ」

バルトがギロリと睨み付けるが、塀を渡るグリフはケラケラ笑っていた。

この二人、性格も種族も全く違うのに、良く友達でいられるものだ。

バルトはため息を吐きながら、銀髪を掻く。

「祭り” 　　つてのは、“虹夜祭”の事だ」

「こーやさい？」

「そ。一年に一度、レインボーティアから天に向かって虹の柱が現れる。しかも“陽が沈んだ後”にな。その変わった虹が出ないと、この街に平和は運ばれない」

レインボーティアとは街の中心にある噴水の事だ。

あの噴水から直線だけど、虹が伸びる。

一年に一度、虹の使者の涙をのせて、幸せを呼ぶ為に。

でも。

「何でそんな現象が……」

「詳しい話は俺も知らねえけど、“虹の使者の想い”が虹となって、神サマとやらに届けてるんじゃないやねえの。その辺は“親父”とか“竹じい”に聞けば、後で詳しく教えてくれるさ」

菖蒲は何となく複雑な気持ちになり、軽く頷いておく。

先ほどのヘレンの様子を思い出し、どうにも気分が上がらない。

あの何かを求めるような哀しい目。

何かを探すような切ない目。

そして名を告げた時の泣きそうな目。

全ては一瞬の内に、菖蒲へ飛び込んできたもの。

しかし、菖蒲の心に重荷となるには、十分過ぎる内容だった。

私には関係ない。

早く帰る方法を見つけてるんだから。

首をぶんぶん横に振り、心の靄を振り払う。

しかし、一歩踏み出した時に違和感を覚えた。

一瞬空気が冷たくなり、街の騒がしさが遠くなる。

えっ。

いつの間にか、菖蒲は“街中”ではなく、“林の中”を歩いていた。

さつきまで、石タイルの西洋風な街中を歩いていたのに。

さつきまで、半獣の人々が走り回ってたのに。

しかし誰もいない。木々が頭上でサワサワと音をたてるだけ。

戸惑う菖蒲に対し、バルト達は何事も無かったかのように菖蒲を追い越していく。

しかも彼らの背後に見えるのは、ホーリータウン。

ばっさりと、まるで色の違う折り紙を二枚で、継ぎはぎでもしたかのような。

「ねえ。ココなんかおかしくない？」

菖蒲は小走りでなんとかバルト達に追いつく。

隣にいたグリフは、にこっと笑った。

「だって、ボクらは人様の屋敷内に入ってるんだもん」

“屋敷に入っている”。その一言の意味が分からず、首を傾げる。

「ココは“草壁家の中庭”だよ」

「ななな中庭？」

菖蒲は、思わず聞き間違いかと思った。

確かに、“百合”という子に会いに行くのは聞いていた。

つまり“草壁家中庭”というのは、その子の敷地内という事なの

か。

馬鹿な。

私は普通に街を歩いていただけなのに……。

何で他人の敷地内になんか。

上を見上げた菖蒲は、目と口が同時に開く。

何故なら門は合った。

ちゃんと街との間に合った。

ただ、大きすぎただけだった。

う、そ。

枝に隠れて見えにくいのが、柱が二本ちゃんと立っている。

だが、間は50m以上あり、高さも半端ない。

ここからでは単なる黒い塊にしか見えないが、頂上は屋根状になっており、大きな表札が掛っているとバルトは言う。

「な、なんか色んな意味であり得ないんだけど……」

「草壁家はこの街一番の金持ちだ。ついでにグリフがさっきまで歩いていた外壁、あれもココのなんだ」

「ええッ」

菖蒲は軽く目味を覚えた。

ホーリータウンの全部を見たわけではないが、恐らくこの街の三分の一は、草壁家ではないかと思う。

同時に“百合”という存在が遠くに感じた。

いわゆる“凡人”と“お嬢様”の差というヤツだ。

菖蒲は気まずそうに目を泳がせる。

「ねえ、グリフ君、バルト」

「なあに？」

「なんだよ」

会う前からこんな事聞きたくないけど……。

「“百合”ちゃんって、どづいづ子？」

その質問に硬直する二人。

バルトは無表情で頬を掻く。

「どづいづ子って……」

そしてゆっくり菖蒲を指さした。

「アヤメより頭が良くて、アヤメより可愛いくて、アヤメより言葉遣いがしっかりした子」

ブチツ。菖蒲の額に血管が浮かび上がる。

ある程度の違いは予想していたが、ここまで言われると腹立たしい。

グリフはその隣で苦笑いしていた。

「まあバルト。確かに事実だけどはっきり言っちゃ駄目だよ」

フローのつもりか馬鹿ウサギ。

「そう、だな」

「でしょー。アヤメちゃんは、とっても可愛いんだから　ねええ？」

「……別に気を使わなくても良いわよ」

哀れみの瞳で見られた菖蒲は、顔を真っ赤にして林の中を進んでいく。

その後も、グリフが大声で『可愛い』だの、『愛してる』だの、赤面するようなセリフを吐くが、菖蒲は完全に無視した。

そんなこんなでやっと見えて来た、草壁邸。

いかにも歴史の古そうな木製の大きな家。

明治初期の豪邸のようなデザインに、玄関にも立派な彫刻がある。しかも改めて扉の所に『草壁』と表札が掛っていた。

うわ。

本物の豪邸だ……。

呆気にとられていると、バルトとグリフがすたすたと中に入っていく。

菖蒲も慌てて二人を追い掛けた。

「いいの？　勝手に入っちゃって……」

「いいのいいの。いつもこんなだし」

「そーそー」

そうは言われても不安を隠せないのが、人というものである。
玄関に入るものの人っ子一人いないし、気配もしない。

外見は立派だが、実際人は住んでいないのではないかと思うほど。
菖蒲が不安げに背伸びしていると、グリフがいきなり声を張り上げた。

「ゆうりいちゃああんッあっそびましょおお！」

ガキか！

今時の子供でも、そんな誘い方はしないだろう。

無論、中からの反応はない。グリフは頬を膨らませ、再び声を張った。

「はあやく出ないとお前の目ん玉ほじくるぞお！」

なんでト〇ロ!?

何故、不思議の国でジブリアニメのセリフが出てくるか分からないが、色んな意味で不安になる。

菖蒲はツツコミ所の多さに堪えながら、隣にいるバルトを見上げた。

「ね、ねえ……本当に大丈夫なの？」

「大丈夫だって。いつもこんなだし」

いや、君から一言止めてあげなよ。

変な所で常識に欠けているバルトに対し、菖蒲は絶望に近いもの

を覚える。

冒頭の方に『二人は相性が悪い』と書いたが、案外ボケとツッコミで相性抜群なのかもしれない。

しかしあれだけ騒いだのにも関わらず、人が出てくる気配はない。しーんと言った耳鳴りが、虚しく響くだけ。

「……やっぱり、いないんじゃないかな」

菖蒲が苦笑まじりにグリフの顔を覗き込む。

本人はぷくつと頬を膨らませているが。

「ちえツつまんないのぉ」

「もしかしたら街中にいるのかもな」

「……わたくしは、ここです」

「だよ。あれだけ騒いだら嫌でも聞こえるもん」

「アヤメちゃん、“嫌でも”って酷くない？」

「……わたくしは、ここにあります」

「仕方ない、もうすぐ日が暮れるし噴水前に行くか」

「……無視だけは、とても心が痛みます」

「そんな無視だなんて……ぎゃあああッ！」

今頃になって、自分の背後に白い着物を着た少女が居たことに気付いた菖蒲。

思い切り尻もちをつき、玄関先に転んだ。

「お、おおお化っ……」

「よオ“百合”ツ花摘みに行ってたのか」

「じゃあ呼んでも来ない訳だね」

和気あいあいと少女を囲むバルトとグリフ。

状況が飲み込めない菖蒲は、一人呆然とするしかない。

えっと……

この子が百合ちゃん？

日本人形を思わせるような黒く長い髪。

白い生地にピンクの百合が描かれた着物。

百合は細い瞳を隠すように、白い頬の朱を隠すように、腕いっぱいの花に顔を埋めた。

「……わざわざ遊びに来てくれたんですね」

ゴニヨゴニヨと、かすれるような声で呟く百合。

見た目からも、きつと大人しい子なんだと思う。

バルトは微笑みながら、百合を見た。菖蒲と出会ってから、初めて見せた優しい笑顔をだった。

「まあ遊びに来たって言えばそうなんだけど。ちよって聞きたい事があつてな」

「……聞きたい事、ですか？」

バルトの視線が、菖蒲に移る。
それを追うように百合も、菖蒲を見つめた。
菖蒲は自分を指差しながら、戸惑うしかない。

え、わわ私？

我に返った菖蒲は、慌てて立ち上がり砂を払った。

「わ私は……えつとそのオ」

「こいつはアヤメ。今日会った」

「そうそう。面白いし、百合ちゃんと同じ花族なんだよ」

隣にいたグリフが馴れ馴れしく、菖蒲の腕を組んでくる。

当然振り払おうとするが、グリフの手がそれを許さない。

しかし動揺する菖蒲を無視して、百合はにっこりと微笑んだ。

「……わたくしは、花族の“草壁 百合”と申します。同じ花族の方と会う機会がありませんので……わざわざ当家にいらっしやった事、大変嬉しく思います」

深々と頭を下げる百合に対し、菖蒲はどう反応して良いのかわからない。

確かにバルトが言ったように、百合は悲しいぐらい菖蒲よりもしっかりしている。

私と年は同じくらいなのに……。
しっかりしてるなあ。

まるで他人事のように感心する菖蒲。
するとバルトは菖蒲の肩を叩く。

「実はな。アヤメは花族らしいんだけど、記憶を無くしているらしいんだ」

「えっ」

「はぁッ!？」

驚く菖蒲と百合。

てか、私は記憶喪失じゃないし!

初耳も初耳。

自分が花族という事になっていたのは知っていたが、記憶喪失の話は聞いてない。

「しかも、空から突き落とされたらしくてな……そのショックで今は名前しか」

「まあ!」

「オイオイオイオイッ」

同情の目で見られた菖蒲は、慌てて手を前に出した。
何が起こっているのか分からないが、とにかく話が大きくなっている。

菖蒲は三人を見渡しながら、声を荒げた。

「ちよ、ちよつと待って皆誤解してるよ。私は、記憶喪失じゃない。私は花族でもない。本当は“人間”なの！」

暫しの沈黙。

バルトはポカンとしており、百合は硬直。

グリフは目をぱちぱちさせている。

息を切らしながら、菖蒲は皆の反応を待つしかない。

「アヤメちゃん……」

初めに口を開いたのは、グリフだった。

「頭大丈夫？」

「へ!？」

まさかの切り出しに菖蒲は絶句するしかない。

だいたいグリフに頭の心配されるなんて、それだけで一大事だ。

「アヤメちゃん、隠したいのは分かる。でも、嘘はいけないよ」

「アヤメさん……。なんだか可哀想……」

「ゆ、百合ちゃん!？」

「アヤメ。俺達はちゃんと分かってるから」

「ちよ、ちよつとオ!」

菖蒲を囲み、力強く頷く三人。
よつするに菖蒲の主張は信じてもらえなかった訳だ。

な、なんで信じてくれないの。

確かバルトは『不思議の国には人間はいない』と言っていた。
恐らくその主観から、『人間だ』と言う菖蒲の主張を信用しない
のだろう。

結局、この三人に何を言っても無駄という事。

最悪だあ…………。

がくりつと、菖蒲はうなだれる。

「　　そういう訳で、花族の百合に聞けば、何か手がかり掴めるか
なって思ったんだけど…………」

バルトが申し訳なさそうに百合を見る。

だいたい菖蒲は花族でないのだから、百合に聞いても何も分かる
はずもない。

しかしどうせ何を言っても信用してもらえないので、菖蒲はぶい
つとそつぽをむいた。

「…………香り」

百合が、小さく呟いた。

「…………アヤメさん、『レインボーティア』の水と同じ香りがします」

「えっ？」

そつぽを向いていたが、慌てて自分の服の匂いを嗅ぐ。
あまり気にならなかったが、噴水の水しぶきでも掛ったのだろうか。

バルトは苦笑しながら、百合を見下ろす。

「うーん……。香りとかじゃなくて、アヤメを知ってるかどうか聞きたかったをだけど」

百合は、ぽかんとバルトを見上げる。

隣でグリフも首をすくめて、くすくすと笑う。

菖蒲は相変わらず、自分の服の匂いを嗅いでいる。

バルトは、小さくため息を吐いた。

「ま、いつか」

誰でもこんな者達に囲まれたら、聞く気も失せるだろう。
するとグリフは、ポケットから懐中時計を取り出した。

「おやおやバルト。もうすぐ祭りの開会式が始まるよ」

「ゲツ。そーいや親父に夕方までに『噴水の所に来い』って言われてたんだ」

西の空を見れば、もう太陽が傾き、赤い海に飲まれていた。
バルトはチツと舌打ちをしながら、翼を広げる。

「俺はグリフと先に噴水の所に行く。アヤメ、お前は百合と一緒に歩いて噴水の所に来るんだ」

「ななんでえ!？」

当然ながら、菖蒲は意味の分からない提案に抗議する。

皆一緒に行けば良いじゃん。

百合の事は嫌いではないが、二人並ぶと自分が『ガサツ女』だと皆に見られそうで少し嫌だ。

しかしバルトもグリフも、二人を置いて行く気満々だ。

「馬鹿いうな。お前ら空飛べないだろ、歩いていたら本気で遅れちまう」

「グリフ君だって飛べないじゃん」

「こいつは『ウサギ族』だぞ？ 飛べなくても“俊足”があるんだよ」

にやりっと、バルトは笑いながらグリフの足を指さす。

菖蒲は、ぶーと頬を膨らますしかない。

「大丈夫だよ。ボク噴水前で待ってるし」

「じゃあそいう訳だから。アヤメ、百合を頼んだぜえ!」

「ちょ、ちょっとッ」

菖蒲の静止を聞かずに、鳥は飛び去り、ウサギは走り去ってしまった。まさに、どひゅんツという効果音付きで。

菖蒲は、手を伸ばしたまま、人間離れた奴らの背中を見つめて

いたが、今は何も無い。

本当に行っちゃった……。

気まぜく残る、菖蒲と百合。

菖蒲はぎこちなく百合の方に首を向ける。

「ええつと……百合ちゃ」

「……わたくし達も行きましょう」

「へ？」

まさかの切り替えに、菖蒲は硬直する。

百合はにっこり微笑んでいた。

「……虹夜祭。とっても綺麗なんですよ。バルトさん達とも、あちらで合流出来ますし」

戸惑う菖蒲に、百合は手を差し出す。

「……わたくし達は、今日から『お友達』ですよね」

『お友達』

この一言に、菖蒲はにっこり笑って手を取った。
白くて、とても柔らかい手。

礼儀正しく、でも菖蒲と同じ女の子。

「そうだね、私たちは今日から『友達』」

二人の顔が、夕日に照らされる。

「私は“宮原 菖蒲”。よろしくね」

こちらの世界に来てから、初めてまともな自己紹介をした。

「こちらこそ、よろしくお願いします」

百合はぺこりと頭を下げた。

バルト達も友達だが、この世界で初めて出来た女の子の友達。

例え自分が人間だと信じてもらえなくて良い。

いつかきつと、分かってもらえる日がくるから。

二人は微笑み合いながら、林の中を歩いていく。

すると人の気配のしなかった屋敷から、一人の老人が出てきた。

菖蒲達は話込んでいて、全く気づいていない。

老人は、地面にまで届きそうな白い髭を撫でながら、二人の背中を見つめる。

「フォッフオ。百合も虹夜祭に行ったか……」

だが今年は少し違うようだ。

いつもならバルトやグリフが迎えにくるはずなのに、今回は見た事のない“女の子”。

『レインボーティア』の水と同じ香りをした “あの子” に似た女の子。

閉じていた瞳が驚愕に見開く。

「あ、あの子は……」

瞳に映るのは、菖蒲の笑顔　否、二十年以上前の一人の少女。
しかしそんなはずがない、とても言わんばかりに首を激しく振っ
た。

あの子はもういない。

あの子は消えた。

虹の使者・“アイリス”は、もう……。

記憶の光は、陸地に吸い込まれていく。

「な、なんだよ……コレ」

レインボーティアに辿り着いた、バルトとグリフは絶句する。
辺りが“赤い”。

夕日の赤より、更に深い赤。

街の住人達が、まるで桜の花びらのように道に散っていた。暫し目の前の光景に硬直していたが、バルトは近くの電柱に寄りかかっていた鳥族を抱き起こす。

「おいッしっかりしろ。何が起きたんだ！」

額から血を流しながら、男は微かに口を開いた。

「……黒い、鎧が」

「黒い鎧？ なんだよそれ」

「バルト」

今まで黙っていたグリフが、静かな声で友の名を吐いた。バルトも異変に気付き、目を細める。

じゃりつと、砂を踏みしめる音。

夕日の陰から覗く、ぐりぐりとした赤い瞳。

バルトは胸ポケットから、銃を取り出し構える。

数が多い。

「グリフ、何人ぐらいだ」

「分からない。でも十体以上はいるね」

グリフも険しい顔つきで、懐から鎖のような物を取り出す。

敵が何で、何が目的か分からないが、ホーリータウンの住人を襲ったのは明白。

これは治安課所属する者として、黙っている訳にはいかない。

大丈夫。

グリフもいるし、きっと親父もすぐ来るはず。

自分達だけで叶う相手ではないのは分かる。

強さは道に横たわる住人達が身を持って味わっている。

しかし持ち堪えられれば良いのだ。

ヘレンが来るまで、応援が来るまで。

「ああ……。ボク治安課じゃないんだけどなあ」

グリフが苦笑しながら呟く。

「今回だけは手を貸せ。後で礼はする」

「じゃあ今度バルトの家にお泊まり会ッ」

いつもだったら一発ぶん殴っているが、今はその余裕もなく頷くだけ。

グリフは分かっているので、苦笑していた。

そして無言のまま、バルトは白い翼を広げる。

「行くぞ」

夕日を背に、黒い鎧が一齐に飛び上がる。

不気味な赤い瞳が、二人の少年を見下す。

この時のバルトは信じていた。

親父　へレンが、必ず助けに来てくれると……。

菖蒲と百合は、夕日に照らされながら『レインボーティア』に向かっていた。

初めは上手くいくか不安だったが、今は何の心配もいらなくらい打ち解けあっている。

笑い合う二人。

しかし菖蒲は静かな街並みを見つめ、微かに違和感を覚えていた。

「なんだか街の人もいないし……」。

「凄く静かだなあ。」

人もいないし、音も声もしない。

昼間はあんなに賑やかだったのに、夕日に沈み、静けさに溺れる町並みはどこか不気味だった。

隣を見ると百合は相変わらずコロコロ笑っていて、気にしてもしない。

「アヤメさん、どうかしました？」

急に黙り込んだ菖蒲を心配したのが、百合が不安げに首を傾げた。菖蒲は首をすくめて、優しく微笑む。

「なんでもないよ」

「そうですね。急に黙り込んでしまったので、驚いてしまいましたよ」

「ごめんごめん」

菖蒲は軽く手をひらひら振る。

百合は安心したのかにつこり笑い、再び会話の続きを始めた。

百合の話は、主にバルト達の事だ。

バルト達は幼なじみで、友達のいない百合に声をかけてくれた。

ただど女の子の友達は何蒲が初めてなんだよ と。

一言一言が楽しそうで、百合は嬉しそうに笑っている。

彼女にとって、あの二人は大切な友人なのだろう。

「そしてバルトさんが止めたのに、グリフさんったら……」

「ああ、グリフ君ならやりそう」

菖蒲もつられて微笑む。

やはりこうしていると、神楽や加奈りんの事を思い出すが、百合も今は大切な友人。

二人も心配だが、やはり今、目の前にいる友人の方も大切だ。

だから、帰る方法を見つける前に“虹夜祭”を眺めるのも、一つの思い出。

少しくらい、こんな時間があっても良いよね。

菖蒲が一步を踏み出した時だ。

(アイリス)

リン……と鳴り響く鈴の音。
菖蒲は、思わず立ち止まる。

えっ。

「アヤメさん？」

百合が、いきなり立ち止まった菖蒲の顔を覗きこむ。
しかし、菖蒲は無言のままだ。

（アイリス）

聞き覚えのある声が、ずっと呼んでいる。
百合には聞こえない声が、辺りにこだます。

この声は……。

（こっちだよ）

声と鈴の音が重なり合った。

菖蒲は、視線を感じて無意識に頭を上げる。

「あっ……」

夕日で闇に埋もれた路地裏。
そこに立つ一人の赤毛の少年。

（アイリス）

首に付けた鈴がリンとなる。
猫耳が風に揺れる。

鋭い視線が、菖蒲を魅了する。
少年はゆっくりと手を前に差し出して、微笑んだ。

(さあ)

「ま、待って!!」

菖蒲は考えるよりも先に走りだしていた。
少年は再び闇の中へ歩き去っていく。
赤い尻尾が、曲線を描いて消えていく。

「アヤメさんッ」

百合が背中に叩きつけられる。
しかし振り向く事も出来ない。振り向いていたら、彼を見失って
しまう。

あ、あの子は……。

菖蒲は息を切らしながら思う。

夢の中で。

旧校舎で私を呼んでいた人。

確信なんてない。

でも声は同じだった。

昨日の夢の中、旧校舎に現れた“猫”の声と同じだった。
だからこそ、彼を見失う訳にはいかない。

全てを聞かなくてはいけない。

何故、君は私の前に現れたのか。

何故、私を“アイリス”の名で呼ぶのか。

何故、私がこの世界に飛ばされたのか。

きつと、彼に聞けば分かる。

菖蒲は、全力で赤毛の少年を追っていく。

でも……。

コレをきっかけ菖蒲の運命は……。

完全に惨劇の迷路の中へ投げ込まれるなんて。

思いもしなかった。

カード6：君に出来ること

「くそッ」

バルトが、息を切らしながら毒付く。

その額からは汗が滴り、緊迫の世界を狭ばせた。

そう、冷や汗。彼は焦っていた。

目の前でぞもぞもとうごめく銀の兜をはめた黒い敵。手には鋭い爪の付いた手甲をはめ、夕日のせいかソレは血の色に輝いて見える。そして今、疲れの色を見せるバルトに、敵は容赦なく手甲を降り振り下ろそうとしていた。

「チッ」

バルトは足首に固定していた銃を取り出し、両手に一丁ずつ構えたまま横にずれる。

そして地を蹴り、着地するまでの間に幾度となく引金を引いた。

弾丸は耳を引き裂くような音を発して、五体の敵に命中。

どれも急所を撃ち抜いた、完璧な狙撃だ。

しかし……

「うあッ」

肩を擦る手甲。

撃ち抜いた敵は、倒れもせず、逆に体制を崩したバルトに斬りかかる。

駄目だ。

銃じゃ相性が悪すぎる。

敵は異常だった。鎧を着用していない黒い身体は、弾に撃ち抜かれてもすり抜けるだけ。

全くダメージがないのだ。

もちろん頭部の兜を狙ってたが、当然ながら弾は弾かれる。

赤い瞳を狙ってみたが、やはりすり抜けるだけ。

攻撃が効かないのだから、バルトは後退するしかない。

ヤバいな。

残りの弾が少ない。

『その場しのぎに過ぎない』。その思いが、結果として銃弾を無駄に使ってしまう形になった。

実に浅はかな判断だった。

事実、すぐに来ると信じていた治安課の仲間や、父親　ヘレンも来ない。

敵は数十体。いつもなら見回り役が空から街を監視し、いち早く敵の存在を教えるのに。

いつもなら、それを聞いたヘレンが直ぐ様治安課を派遣するのに。

明らかにおかしい。

だからこそ、焦っていた。

顔にこそ出さないが、不安は限界に達していた。

大丈夫。

まだ諦めるな。

バルトは冷や汗を拭い、銃を握りなおす。
気が付けば、先ほど撃ち抜いた五体の黒い敵が、じりじりと距離を縮めていた。

バルトは息を切らし、再び銃の引金に指をかける。
しかし。

「バルト、撃つな」

突然、響いた友の声。

次の瞬間、“鎖”がバルトの目の前を通り過ぎる。

その鎖は、今にも襲いかかりそうな黒い敵の兜部分に巻き付き、動きを封じた。

しかも、鎖自身に意思があるかのように遠心力を使って、バルトを取り囲んでいた五体全員に巻き付いていく。

これは……。

黒い鎧は釣りのようにくいつと持ち上げられる。

まさに一瞬の惨劇。

ふわりと持ち上げられた身体は、そのまま重力を存分に使い、頭から石タイルの地面に叩きつけられた。

あまりの衝撃に石タイルは粉々に破壊され、敵の兜もぼこりと大きくへこむ。

まるで五体の鎧はガラクタのように地に伏せ、弱々しく身体を震わせていた。

同時に、破壊の余韻が収まらぬまま回収される“鎖”。
その先端に付いている“懐中時計”。

まるでメジャーのように次々と鎖を呑み込みながら、ソレは主の元へ戻っていく。

「ふう。大丈夫だったかいバルト」

グリフがパシッと懐中時計を手で受け止めた。そして額から流れた血を拭いながら、にっこり笑う。

「……助かった。ありがとうグリフ」

バルトは銃を降ろし、ほっと息を吐きながら友に駆け寄った。グリフの身体は傷だらけで、眼鏡にもヒビが入っていた。まあバルト自身、あまり人の事は言えないが。

「治安課の人たちは？」

「駄目だ、無線をいれても応答がない」

バルトは目を伏せ、ベルトに装着している無線に触れた。グリフはこの街の非常事態を察し、眉間にシワを寄せる。

「ヤバいな……。もしかしたら治安課が いや、役場自体がダウンしてるのかも」

「な、に……」

「だってそうだろ。ボクらが闘っている間、応援も来ない。応答もない。理由は一つ “治安課自体が壊滅している” としか考えられない」

「ッ」

冷静に推測を述べるグリフから、バルトは目を反らす。彼自身も気づいていた。ただ、信じたくなかった。今まで街の治安課が折れる事など、有り得なかったから。

「じゃあ、親父は ……」

その非常事態を伝えに来ない親父は。あのクソ親父は。

グリフは首を横に振り、バルトから視線を外した。

「ヘレンさんの事は、ボクには分からない」

目を伏せていたバルトだが、不意に殺気を感じて振り向く。

背後では、先ほど地面に叩き付けたはずの黒い鎧が、ザワザワと立ち上がり始めている。

兜は半壊し、口も鼻もない真つ黒な顔が晒されているが、それほどダメージは受けていないようだ。

グリフはバルトに背を向け、再び懐中時計の鎖を伸ばす。

「でも、一つだけ分かるとしたら ……」

いつもは笑ってばかりなのに、身も凍るような真剣な瞳。

「遠距離、中距離戦向きなボクらにとって“こいつら”は相性が悪すぎる。ましてや数も多い。 ……力尽きるのも、時間の問題だ」

その意見にバルトも同感だった。

どんなに銃の腕が良くても、いくら鎖を自由自在に操れても、接近戦には向いていない。

ましてや敵は兜の部分しか打撃技を受けない。

どう考えても、今の自分達にはこの化物共に勝てる訳がなかった。

でも俺は。

バルトは銃をしまい、直ぐ隣で崩れていた屋台の瓦礫に手を伸ばした。

そこから引つ張りだす、鉄パイプ。

ずしりと来る重みに耐えながら、一・二回それで空を斬る。

グリフはそんな友を隣に思う。

こいつまさかと。

「それでも……“戦うしかない” そう思うんだ」

バルトは弱々しく、また哀しげに微笑んだ。

それは治安課としての意地、街への思いから来た必死の決意。

グリフはヒビの入った眼鏡をかけ直し、また苦笑する。

「そういうと思ったよ」

二人は再び敵に向き直る。黒い鎧達は赤い瞳をギョロつかせ、

二匹の獲物を舐めるように見つめている。

しかし、その視線が一瞬横にずれたのをバルトは見逃さなかった。

なんだ？

全くの予想外だった。

いや、誰が予想しただろう。

バルトの顔が引きつる。

だって“彼女”は立っていた。

この荒れ果てた戦場の隅に立っていた。

白い着物を揺らし、怯えたように顔を引きつらせる少女。

“百合”が、そこにいた。

「ゆ、百合ッ！」

「百合ちゃん！」

バルトもグリフも、突然現れた百合に驚きを隠せない。

今すぐ駆け寄りたいが背を向けた瞬間、黒い鎧はバルト達の身を斬り刻むだろう。

バルトは視線を化物共に向けたまま声を張った。

「馬鹿ッ早くここから離れろ！」

「……あ……っ」

百合は恐怖に足がすくみ、動けないのか涙目でこちらを見てくる。それもそのはずだ。祭りを楽しみに来たのに、建物は崩れ、住人

は倒れ、そして大切な友人が見た事もない生物に取り囲まれているのだから。

この事態に、グリフも焦りを隠せない。

「おい、アヤメちゃんがないぞ」

「馬鹿なッ」

思わず振り向くが、菖蒲の姿はどこにもない。一緒に来るようにと言ったはずなのに。

アヤメの奴、どこに行ったんだ！

早く百合を安全な所に行かせなければ。気持ちの焦りが、冷や汗となって吹き出す。

しかし黒い鎧達は、顔をひくひく揺らし百合の方を向いていく。

完全に二人から狙いが反れた。あきらかに百合を狙っている。

それでも動かないのは互いを止めている緊張という名の糸。

本気で視線を交して、かろうじて繋ぎ止めている一本の糸。

視線を少しでも外せば、その命綱は切れてしまっだろう。

でもッ。

バルトは歯を噛み締め、足を引いた。

「ちくしょオオッ」

「バルトッやめろ！」

グリフが悲鳴に近い声を上げる。

しかしバルトは走っていた。
敵に背を向けて、百合の元へ走っていた。
繋ぎ止めていた糸が切れ、黒い鎧が一斉に飛び上がる。

間に合えッ。

背中に感じる鋭い殺気。

間に合えッ。

どちらが早く百合に辿り着くかも分からない。

間に合ええッ！

バルトは声を荒げながら、たった一人、恐怖に震える百合へ手を伸ばす。

後少し。

後少しで、手が。

髪が。

肩が　　ッ。

「ユリiiiiッー」

息も付かずに、百合の身体を抱きしめる。

ふわりと漂う花の香り。

間に合った。

腕の中で、百合がそっと顔を上げた。

「ば、バルトさ……」

もう大丈夫。俺が守るから。

そう安心させるかのように微笑んだはずなのに、口元が上手く上がらない。

その口からこぼれる赤い血。

思わず顔が引きつった。

脇腹に突き刺さる、手甲。

黒い鎧が、カタカタと笑う。

「く……そ」

バルトの足から、力が抜ける。

赤い空がぐるりと一回転する。

深海に沈んで行くような錯覚。

グリフが、百合が、叫ぶ。

でも答えられない。

声が、出ないんだ
……。

ぶわあッ。

花畑に吹き抜ける風。

花は線上に波打ち、花びらが蝶のように空を飛ぶ。

ここはバルトと初めて出会った花畑。

菖蒲は、その中で立っていた。

一人息を切らし、視線を一点に集中させている。

その先にいるのは、“赤毛の少年”。

しかし少年は、ただ宙に浮かんだ色彩の蝶を見つめている。

二人の間に流れる沈黙。

一体どれだけの時間を沈黙で埋めただろう。

でも何を話していいのか分からないのだ。

せつかく追いついたのに。
せつかく声が聞こえるのに。
せつかく目の前にいるのに。

菖蒲は、ギョツと拳を握りしめる。

逃げちゃ、いけない。

この少年に聞けば、何か分かる。そう思ってここまで追い掛けて来たのだから。

「あ、あのッ」

少年の視線が蝶から菖蒲に移る。

「あなたは……だれなの？」

他にまともな質問が浮かび上がらなかった。
赤毛の少年は、キョトンとしていたが優しく微笑む。

「僕かい？」

透き通るような金色の瞳。

そして、ゆっくりとこちらに歩みよる。
首をすくめ、苦笑しているようにも見えた。

「僕の事なら……君の夢で少し言ったはずんだけど」

「ほえ!？」

まさかの切り返しだった。

思わず顔が赤くなり、なんだかとても恥ずかしい。

だいたい夢の中の事なんて、今更覚えているはずがない。

それでも菖蒲は必死に思いだそうと、頭を襲えてブツブツと独り言を呟く。

「な、なんだっけ……。あッ“アホ毛”の」

「うん。“赤毛”の『ノーティ』だよ」

ノーティはくすくすと笑った。

菖蒲は顔を真っ赤にして、硬直するしかない。

アホだ、アホやん私ッ。

失礼極まりない自分。思わず自己嫌悪する今日この頃。

しかし今はそんな事はどうでも良い訳であり、菖蒲はブンブンと首を横に振った。

とりあえず咳払いをし、気を取り直す。

「『夢の中で言った』……って、やっぱりあなたが」

「そうなるね」

「旧校舎に居た猫。あの猫ももしかして」

「そう。アレは僕が周りに怪しまれないように変身した」

「なんで？」

その問いに黙り込むノーティ。
相変わらず風は吹き続け、花びらが宙に舞う。　ノーティは困ったように頬を掻き、目を泳がせる。

「僕には、君が『必要』だから……」

「は？」

何を言っているのか分からなかった。

『必要』の意味が分からなかった。

グリフが良く言っているような悪ふざけなのか。
でも、夕日に背を向ける少年の顔は本気だ。

「アイリス、君には僕と一緒に闘って欲しい敵がいる」

「闘って欲しい……敵って？」

「今はまだ何も言えない。　けど、『デイスファイア』という呪われた種族が蘇ってしまった」

菖蒲はいきなりの事に呆然とするしかない。

闘い。敵。蘇った。

どれも菖蒲には関係ない事で、菖蒲にはどうする事も出来ない現実。

「君は聞いたはずだ。あの鳥族の少年に」

「えっ」

「今から二十二年前、この国はとてつもない“邪”に襲われていたと……」

その話に、菖蒲は小さく頷いた。

確か不思議の国は邪に襲われていた。

けど、『虹の使者』が邪を取り除いたと……。

「それが、どうしたの？」

「今、現代に過去と同じ事が起ころうとしている」

ノーティはぐつと息を止め、悔しさを、過去を噛み殺す。

その迫力に、思わず息を飲んだ。

「だから、君には僕と一緒に闘って欲しい……」

「え」

「全てが、“あの時”のように手遅れになる前に。僕には君しか

」

「ままま待つて！」

菖蒲は手を前に出し、話に歯止めをかける。

急に話を止められたノーティは、目をパチパチさせるばかり。

菖蒲はゆっくり深呼吸し、そして顔を上げた。

「ちょっと、意味が分からないよ。私は全然闘えないし、私は普通の女子高生だし……。それより元の世界に帰りたいの、加奈りん達

の所へ返して」

ノーティは、無言でこちらを見ている。

その顔はとても悲しそうで、とても切なくて。 菖蒲の心が、一
気に締め付けられる。

なんで……。

ここの世界の人たちは、こんなに悲しそうな顔をする。

「元の世界へ、帰りたいのかい……？」

菖蒲は声が上手く出せず、頷いた。

「……帰るのは簡単だ。ゲートをくぐれば良い」

「ゲート……？ それはどこに」

『でも、君が帰れば多くの命が犠牲になる』

不意に菖蒲の背後を指さすノーティ。

そこには、周囲を囲う木の隙間から見えるホーリータウン。

何かを感じた菖蒲は、誘われるまま花畑を横切り、その風景に近
づく。

全身に悪寒が走った。

ウソ、だ。

そこから見えたホーリータウンは、黒い煙に包まれていた。
建物は崩れ、子供の悲鳴がこちらまで聞こえる。

ひっきりなしに鳴り響く銃声と怒声。“夢の国”なんてあったもんじゃない。

菖蒲は、あそこで溢れ返る血の臭いまで想像してしまった。ねっとり吐き気に、なんとか胸を押さえ付けて堪える。

菖蒲の目は、恐怖に震え、瞬きすらしない。

「『君が帰る』。でもそれは……この世界の人々を見殺しにする事になる」

いや……。

「それだけじゃない。デイスフィアがこの世界に溢れ続ければ、ゲートを通して君の世界にも現れる」

いや。

『君は、大切なモノを全て失う』

「私には関係ないッッ！」

菖蒲は耳を塞ぎ、目を閉じ、そして叫んだ。

夕日の空に響く、少女の苦悩。

菖蒲はひたすら、首を横に振った。

「私には……関係、ない」

「君は、昔からいつもそうやって逃げて来たよね……」

「知ったような口聞かないで……ッ」

「知ってるよ。僕は、君がお婆様に育てられた時から、あの世界で君を見守っていた」

「ッ」

菖蒲は、涙目で後ろにいるノーティを振り返った。
ノーティは、笑いもせずただ『ごめんね』と言った。

全て決まっていたというのか。
十六年前から、この世界に迷い込む事が。

「だから、僕は君を知ってる。悪い所も、良い所も」

「……私には、何も力はない」

「君は力を持っている。『虹の使者・アイリス』の力を受け継いでいる」

ますます訳が分からなかった。
戸惑う菖蒲を目の前に、ノーティはただ苦笑するだけ。

「あ、いりす……?」

「そう。君が受け継いだ名前」

菖蒲は、間抜けな顔をしてノーティを見上げる事しか出来ない。
“アイリス”は『虹の使者』の名前なのは分かった。

でも何故、菖蒲がその名を継ぐのだ。
何故、力を受け継いでいるというのだ。

そんな力など、自分にあるはずがない。

「君にしか、出来ない事がある」

それでも確信に満ちた声が背後で響く。

「時間が無い。こうしている間にも、君は『大切なモノ』を失
おうとしているんだ」

目の前で崩れ行くホーリータウン。

あの中には、バルト達がいる。

置いて来てしまった百合がいる。

「君には……僕と同じ想いをさせたくないんだ」

ノーティの手が、優しく菖蒲の頬を撫でた。

とても冷たく、微かに震えていた。

ノー……ティ。

「早く行って。君は運命を変えなくちゃいけない」

手が離れ、ノーティはゆっくりと後ろに歩きだす。

菖蒲を置いて、夕日に背を向けて。

また一人、暗闇の中へ帰ろうとしている。

「自分を信じて……」

「の、ノーティッ」

“置いて行かれる”。

急に怖くなつた菖蒲は、必死に手を伸ばす。

まるで迷子になつたような 『母さんに捨てられたような時』
と同じ心の痛み。

「大丈夫」

駆け寄つて来る菖蒲に、ノーティは優しく笑つた。

「また会いに来る。力を授かり、決意した頃に……。」

「無理だよッ私なんか」

『僕は、いつでも君の近くにいるよ 忘れないで……』

すっ……。

菖蒲が抱きしめようと、手を交差させるが腕の中には何もなかつた。

菖蒲は歯をくいしばり、今にも溢れそうな涙を堪える。

ノーティは、酷い。 言うだけいって、すぐまたどこかへ消えてしまふなんて。

まだ、聞きたい事もたくさんあつたのに。

私は、どうなるんだろう……。

正直、帰り方もまいち分からない。

でも自分が元の世界に帰れば、『大切なモノ』を失う。
こちらの世界も、元の世界も。
菖蒲は、涙目で壊れ行くホーリータウンを見つめる。

バルト達……大丈夫かな。

バルトは治安課所属だと言っていた。
ならば、闘っているのかも知れない。

呪われた種族・『デイスフィア』という者達と。

ぞくつ。

背筋に、不気味な寒気が這い上る。

胸が締め付けられ、嫌な予感が止まらない。

な、なんだろう。

嫌な予感がする。

訳は分からない。でも、のんびりしている暇はない。

菖蒲は涙を拭い、花畑を走りだした。

空気は生温く、汗がべたつく。

菖蒲は嫌な予感で、心が押し潰されそうになった。

なんでこんなに胸騒ぎがするんだろう。

その予感に後押しされ、菖蒲は更に足を早める。

空はもう、赤色から青紫に変わり初めていた。森は、日が沈んだ

せいでかなり薄暗い。

「ッ」

菖蒲は太い木の根に足を取られ、顔面から地面に転んだ。
じんじんと鼻が痛み、顔が泥で汚れている。

今の自分には、『大丈夫？』と声を掛けてくれる人がいない。
それがまた涙が誘って、菖蒲の心を締め付けた。

ノーティは、何で私を“監視”していたんだろう。
何故。十六年も、ずっと……。

菖蒲は伏せたまま身体を震わせ、ぐしッと涙を拭う。

いかなきゃ。

擦り剥いた足を摩りながら、再び立ち上がる。
彼女は必死だった。
早く皆の顔が見たかった。

ただ一言。

『君には……僕と同じ想いをさせたくないんだ』

ノーティの悲しい表情が、頭から離れなかったから。
菖蒲は走り続ける。

呼吸が苦しい。
前が見えない。
心臓が割れる。

耳に響く自分の息切れを聞きながら、次第に見えてくる門。

ホーリータウン入り口。

バルトツ。

菖蒲は門に激突するかのようにつき、足を止める事なく街の中へ入る。

中は、まさに地獄絵だった。

至る所で建物が崩れ、燃え、酷い場合には住人が建物の下敷きになっている。

子供も母親を求め泣き叫び、その度に菖蒲の鼓膜を痛ませた。

それでも、菖蒲は目を反らして走り続ける。

自分には行かなくてはいけない場所がある。

会わなくてはいけないヒトがいる。

もし今、目の前にいる人々を助けていて、バルト達に一生会えなかったらきつと後悔する。

だから私が立ち止まっちゃいけない。

菖蒲は血溜りを飛び越え、弱々しく手を伸ばす住人を追い越し、友人の元へ急ぐ。

虹夜祭の舞台である『レインボーティア』へ急ぐ。

菖蒲は今にでも、泣きそうだった。

お願いッ

間に合って……ッ。

目的地は、祭りの舞台　レインボーティア。

菖蒲は身体で風を切りながら、全力で街中を駆け抜けていく。

「ア……」

止まる時間。

目が、落ちてしまいそうなほどに極限まで見開く。

噴水前は、黒い鎧　　ディスプレイアで溢れかえっていた。

何体かは噴水にへばりつき、他は一人の少年に集中攻撃している。

グリフだった。

「あ、アヤメちゃん!？」

グリフは菖蒲に気づき、鎧で敵を弾きながら振り向いた。

しかし、菖蒲にはどうでも良かった。

気になっていたのは、足元でうずくまる百合　　の腕でぐったり
と赤色に染まっている者。

菖蒲は、よたよたと歩きだす。

「アヤメちゃん、こっちに来ちゃ駄目だ！」

グリフが叫ぶが、菖蒲は立ち止まらない。

今の菖蒲には、自分の身の心配なんてする余裕がなかった。

菖蒲は鳴吐をもらしながら、百合の元へ向かう。

ウソ、だ。

途中、デイスファイアが菖蒲に手甲を振り上げる。

グリフが直ぐさま鎖を放とつとするが、その前に菖蒲は容赦なく右手で兜部分を殴った。

「……邪魔だ」

その威力で兜は粉碎。他のデイスファイアは、泣きながら進む少女に恐れ、ピタリと硬直する。

グリフまでも、人間離れした菖蒲に目を奪われていた。

ウソだ。

周囲が凍りつく中、菖蒲は百合の前に立つ。

自分を覆う、影に気付いた百合。

百合は身体を震わせながら、赤く腫れた瞳を上に向けた。

「あ、アヤメさん……ッ」

弱々しく、今にも消えそうな声。

唇を噛み締め、彼女なりに熱い想いを堪えている。

「わわたくしのせいで、バルトさん……バルトさんがッ」

真っ赤に染まった腕を、ゆっくりと広げる百合。
菖蒲は、絶叫しそうになるが息を止めて堪える。

「うああ……ッ」

膝に抱かれていたのは、腹部から大量の血を流す“バルト”。
顔は青白く、銀髪にも血がつき、周囲にはバルトの羽が雪のように散っている。

赤い雪に埋もれた少年。

爪の割れた指で、そっと頬を撫でるがバルトは目を閉じたままだ。

「ううッ……」

菖蒲はガクリと血溜りに足を沈ませた。

私のせいだ。

この世界で初めて出会ったバルト。

私が百合を置いて行ったから。

約束を守らなかったからッ。

いつも対立ばかりしていたが、なんだかんだ優しくしてくれた。
本当はもっと怪しむべきなのに、まるで昔からの友人のように接してくれた。

でも今は、その身体が段々と冷たくなっていく。

「いやだ……」

菖蒲のせいで。

「いや、だぁ……ッ」

菖蒲のせいで。

「いやだよぉ……ッ」

約束を、守らなかったせいで　　ッ。

「君は、大切なモノを全て失う」

「　　うわぁぁぁぁぁぁッ」

菖蒲が、絶叫をあげながら涙を流す。
今まで歯止めをかけていた何か切れ、心のダムは決壊を続ける。

「うわああああッ！」

グリフも百合も、デイスフィアまでもが絶句していた。

それでも菖蒲は泣き続ける。

自分の泣き声で、この世界の音の全てを掻き消した。

涙が、大粒の雨のように地面に溢れる。

同時に視界の隅で、虹色に輝きだすレインボーティア。

「……………な、なんだ」

グリフは異変に気付いた。

何やら地響きが、している。

しかも噴水にへばりついていたデイスフィアは、一瞬にして蒸発した。

光増して行くソレは、まるで菖蒲の涙に共鳴しているかのようだった。

「うわああああッ！」

菖蒲の周囲が虹色に輝きだす。

光が渦巻き、風が巻き起こり、菖蒲の座り込んでいるブロックの地面が破壊され、宙に舞う。

泣き声で、街の窓ガラスが一齐に割れる。

その気迫に、グリフは本能的に百合とバルトを掴んで菖蒲から離れた。

菖蒲を囲む虹の柱が、渦を巻きながら天へ登っていく。

「あ、あの子は……………一体」

グリフは、呆然と菖蒲を見つめる事しか出来ない。
するとレインボーティアから放たれていた虹の光が、一点に収縮
されていく。

『もう泣かないで、君は強い子だから』

菖蒲の中で響く、不思議な声。
菖蒲は閉じていた瞳をゆっくり開く。

『君は優しい子』

『君は思いやりのある子』

『君は仲間の為に泣ける子』

『そして、“幸せを運ぶ者”』

その光が、菖蒲に飛んで来る。
ふわふわと浮かぶ不思議な光は、そつと菖蒲の手の上に収まった。
泣いていた菖蒲も、これには戸惑いを隠せない。

「これは」

『君に力を授けよう』

手の平に浮かび上がる光が消え、落ちて来たのは“一枚のカード”。
トランプの“スペードのエース”。
カードを手にした菖蒲は、ただじつと見つめる事しか出来ない。

『さあ唱えて』

「唱え、る？」

『“スペードのエース、召喚”と……』

菖蒲は、ただカードを見つめ握りしめる。

何が起こるのか分からない。

でも、今の自分に出来る事ならなんでも良かった。
バルトの仇を、取れるならばなんでも良かった。

だから菖蒲は涙を拭い、カードを掲げる。

ノーティが言ったように。

これ以上、皆を苦しませないように。

運命を変える為に。

「『スペードのエース召喚』ッ」

唱えた。

カードから溢れだす光。

コレが、菖蒲の戦いの始まり。

不思議の国のアイリス

皆の物語を背負った、初めの踏み出し
……。

カード7：虹色のキセキ

ホーリータウン郊外の林に立たずむ、長い髭の老人。
血煙漂う街の中、視界を埋め尽すは“優しい光”。

「あ、あの光は」

闇の中で見つけた“希望の光”。
幸せを運ぶ“虹色の光”。
毎年行われる虹夜祭など、比ではない。

「まさか……帰って来たというのか」

否、“蘇った”の方が正しいだろう。
あの輝きはこの街の“切札”が、『主』に服従を認める時の輝き。
その『主』とは、知る限り一人しかいない。
その主の名は、『虹の使者・アイリス』。

しかし、彼女はもう……。

「アッ」

老人の脳裏に蘇る、一人の少女。
夕方、孫と共に虹夜祭へ向かった少女。
彼女に、アイリスに似た少女……。

遠目でしか見ていない。
しかし、老人の記憶にはしっかり焼き付いていた。

「…………ツ」

軽い舌打ちと共に走りだす老人。
ひいひいと、情けない声を上げながら。
骨と皮だけになった腕を振りながら。
街の中心で輝く、虹色の柱のもとへ走りだす。

ただ、会いたかったのだ。

アイリスに。

そして謝りたかったのだ。

アイリスに。

例え、彼女が別人だとしても。

アイリスなら。

彼女なら。

『笑って受け入れてくれる』

そう思ったから…………。

……カッ！

「あ……あ」

歓喜とも恐怖とでも言えるような吐息。

グリフは額から流れる血で片目を潰しながらも、目の前の光景から目が離せないでいた。

周囲を圧倒する強い光。

その中で逃げ惑い、力尽きるデイスフィア。

もちろん、一体何が起きているのかなんて分からない。

何故、倒せなかったはずのデイスフィアが一瞬で消えたのかなんて分からない。

今、グリフに出来る事は、後ろにいる百合を守ってやるだけ。しかし……。

ジャリ……ッ。

辺りに響く、砂を踏みしめる音。

それは徐々に光を収縮していく柱の中から聞こえ、同時に少女のシルエットが浮かび上がる。

ジャリ……ッ。

今まで物陰に潜み、光の影響を受けなかったデイスフィアが、一斉にもぞりと動きだした。

ジャリ……ッ。

足音は止まらない。そのペースを遥かに上回る死の足音。

ジャリ……ッ。

グリフは叫んだ。逃げろ、と。

あの光の中心にいる友を救おうと、ただ必死に鎖を伸ばし、彼女に近付いていくデイスフィアを……。

ジュ……ッ。

一瞬に消滅した、デイスフィア。
鎖を構えたまま目を奪われるグリフ。

な、に。

消え行く光の中から現れたのは、今日の昼間に出会った新しい友

人。

ツッコミ上手な花族の友人。

その手には、刃が長い、虹色に輝いた“剣”。

少女はそれを握りしめ、ゆっくりと大地を踏みしめていく。

凜々しい顔つきで。

頬を涙と泥で汚して。

剣を握る右手の裾を、魔力で焼かれながら。

ボロボロの姿で歩いていく少女。

グリフは思う。

一体誰がその姿を醜いと笑い飛ばせただろう　と。

否、誰も笑いやしない。何も出来ない自分に、そんな資格はないのだ。

グリフは震える喉を押さえ、少女の名を呟く。

「あ、“アヤメ”……ちゃん」

風で掻き消されるような、蚊の鳴くような声。

当然、菖蒲は何の反応を示さず、ただ剣を前にかざす。

菖蒲を取り囲むは、十は超えるディスプレイア。

距離として3メートルも離れていない。

しかし、彼女は動じる事なく地面を蹴った。
身を低くし、完全に相手の懐に入った所で一振り。
ジュアツ。光の軌跡を身体に刻み込まれたデイスフィアは、音を
発して蒸発していく。

すごい。

グリフには分かる。“アレ”と闘った今なら分かる。
攻撃を受け付けなかった敵が、少女の振るう斬撃で消滅している。
つまり、それはどういうことが。

“あの子”は。

“化物”以上の“バケモノ”だ。

こんな馬鹿げた結論が成り立つくらいに、今の菖蒲は常識を覆し
ていた。

無論、菖蒲本人はそんな事など気にせず　あるいは意思がない
のか、ただ操り人形のようにデイスフィアへ駆けていく。
そしてもう一度剣を大きく振るが、デイスフィアは一瞬にして視
界から消えた。

標的は、上。

素早く宙に跳ね上がったデイスフィアは、そのまま菖蒲の首めが
け手甲を振り下ろす。

しかし、菖蒲は鋭い眼光を放ちながら直ぐ様後退した。

地響きと共に突き刺さる手甲。

手甲がブロック床にはまった隙を突き、剣をデイスフィアの胴体
に貫通させる。

「アヤメちゃん、後ろ！」

続いて女の背後を狙う、新たな黒い影。迫り来る手甲を振り向き様に剣で弾き、足で兜を蹴り上げた。宙に浮く、その身体に容赦なく光を刻む。

しかも菖蒲は、その体制のまま真横にいたデイスフィアに斬りかかった。

そして剣と手甲を幾度なく重ね合い、大振りになった一瞬にデイスフィアの脇腹に剣を突き刺す。

容赦ない鬼人のような少女。

怒りと正義に身体を任せる少女。

あの子は、本当にアヤメちゃんなのか。

グリフはそう考えずにはいられない。

何故なら、自分の知っている菖蒲は、もっと優しくそうで、もっと微笑みがあつて、もっと……。

「グリフッ」

突然、自分の名を呼ぶしがわれた男の声。

振り向けば、肩で大きく息をする髭長の老人が立っていた。

「あッ。 “竹じい”！」

グリフの声に、百合も顔を上げた。

彼は“百合の祖父”であり、“前代のホーリータウン町長”。

本名は『草壁 竹蔵』。今は“竹じい”と皆に親しまれている花族の老人だ。

竹じいは、孫が抱きしめている赤いバルトを見つめ、そしてしゃがみ込む。

「百合。泣いてばかりではバルトは救えん」

「じ、爺様あ……ッ」

「バルトはまだ助かる。今すぐわしらの家に連れていき、手当てるのじゃ」

「わ、わたくしが？」

泣きながらも、必死に理性を保とうとする百合。
そんな孫の頭を、竹じいはくしゃりと撫でてやる。

「お主なら出来よう。花族の『癒しの力』を持つ、お主ならば」

それを聞いたグリフは、雷にでも撃たれたかのように竹じいを見た。

否 “見た”というより、“睨んだ”の方が正しい。

しかし百合は、暫く硬直してたが、やがて力強く頷いた。

涙を拭い、バルトをおぶい、強い使命感の元で歩きだす百合。

そんな孫の姿に、竹じいは頼んだぞ、と小さく呟いた。

「竹じい……」

グリフは怒りを噛み殺すように、拳を震わせた。
赤い瞳を、更に赤く染めながら。

「貴方は、百合ちゃんの過去を知っている筈だ」

明らかな怒りの中、竹じいはやんわりとグリフを見つめる。

「『癒しの力』のせいで、百合ちゃんは林に引き籠った。関わる者という者を拒絶した 何故、彼女の苦しみが貴方には分からないんだ！」

「いつまでも過去に蓋をしている訳にも参らん」

竹じいの弱々しいが凜とした声に、グリフはぐっと言葉を詰まらせた。

「百合の力は、花族としても草壁家としても、多くの者達の命を救う為にあるもの。それが出来る力を持ちながら、瀕死の者を見殺しにするなど、わしも百合自身も望んでおらん」

「で、でもッ」

「大丈夫じゃ。百合はわしらが思っているほど弱くはない。百合も、バルトという大切な友人を、失いたくないはずじゃからの」

竹じいはフォフォツと髭を揺らして笑った。

きっと百合は、どんなに力を使うのを怖がっても、バルトやグリフの為に必ず力を使う。

今までずっと泣きながらうつつ向いていたのも、術を使おうかと弱い自分と闘っていたからだろう。

そして彼女は決意した。

『バルトを救おう』と。

「でも、街の中は化物共で」

「確かに街の中は酷い有り様じゃが、奴ら “デイスファイア” は全てこの広場に集まっておる。この老いぼれじゃて、一人で広場まで来れたんじゃ。百合とて無事に屋敷へ戻れるじゃろう」

そう、奴らはこの街に溢れる“虹の力”に誘われて襲撃した。

“虹夜祭”という、もつとも『アイリス』の力が溢れるこの夜にあるいは、『アイリス』の匂いに誘われて。

ぐわん。

突如響いた、何か鉄板を殴るような音。

竹じいとグリフは、ほぼ同時に振り向いた。

そこには、未だデイスファイアと闘う菖蒲の姿。擦り傷を負いながらも、一心不乱に剣を振るっている。

デイスファイアの数も大分減り、残り数体。

グリフは、そんな彼女を、消え行くデイスファイアを、じっと見つめる。

「……竹じい。さつき、あの化物の事『デイスファイア』って言ったよね」

竹じいは何も語らない。

ただ菖蒲を凝視し、唇を噛み締めている。

「ボク、なんとなく覚えてるよ。昔、竹じいが22年前の事を話してくれた事を……」

幼い頃に、昔の事をおとぎ話のように竹じいは語ってくれた。だからグリフは『デイスファイア』の名を聞いてから気付いた。奴らがどういう存在なのか、そして……菖蒲は何者なのか。

「『デイスファイア』は、この国を侵していた“邪”なんですよ。」

菖蒲が最後の一体を追い詰める。

「そして、アヤマちゃんが“切札”に選ばれた神の使い手 虹の使者。“切札”を扱う、不思議の国最強のカード使い」

詳しい事は分からない。

でも、きつとそうなんだ。

菖蒲が、身を翻しながら大きく剣を振った。
空気を裂き、悲しみを裂き、光の“キセキ”を刻みながら。

「『虹の使者・アイリス』……ッ」

ジュワツ。

虹の剣に命を打ち切られ、消え行く黒き魂。

「ハツ……あ……あ」

対する菖蒲は、息を切らしながら立っていた。

髪をバサつかせ、服も大分切られている。

グリフは近づくに近付けず、ただ呆然と菖蒲を見つめる。しかし彼女は何を話す訳でもない。響くのは息切れだけ。

菖蒲はそのまま崩れ落ちるように、地面に伏せた。

剣も、柔らかな光を放ちながら『スピードのエース』に戻って行く。

「あ、アヤメちゃん……アヤメちゃん！」

我に帰ったグリフは、直ぐに彼女の元に駆け寄った。

抱き寄せた菖蒲の身体は、とても小さくて、冷たくて、何より顔色が悪い。

だいぶ衰弱している……。

「その子は、“アヤメ”というのか」

グリフが菖蒲を抱き上げた時、竹じいは小さく呟いた。

グリフはぎこちなく頷く。

「う、うん。バルトが言うには、アヤメちゃんは花族で記憶喪失なんだって」

「花、族……じゃと？」

一瞬、眉をぴくりと動かすと、竹じいは菖蒲の頬に少し触れた。

菖蒲自身は無反応だが、険しい顔つきの前にグリフの方が恐縮してしまっ。

「……まあ良い。取りあえず、その子はわしの屋敷へ。わしは動け

る若者を探し、怪我人を手当てしなければならん」

「わ、分かった」

グリフは、竹じいに背を向け、ゆっくりと歩きだす。

彼も、あまり走る体力すら残っていないのだろう。

自分も倒れぬようと、グリフはすっかり地面を踏みしめ、屋敷に向かう。

竹じいは、そんな青年の背中を見送り、菖蒲の手元に落ちていたトランプを拾いあげた。

それは紛れもないこの国の切札　アイリスにしか使いこなせないカード。

竹じいは、ぎゅっと歯を噛み締める。

「一体、この国で何が起こり始めているのじゃ……」

老人の呟きは、誰に向けたものでもなく、ただ空気に溶け込んでいく。

時はすでに夜。

月明かりに照らされ、レインボーティアがほんのり輝いてみえる。

否、レインボーティア自体が輝いていた。

水面に月を照らしていた噴水は、やがて月よりも輝き、夜空に光の柱を放つ。

竹じいという観客を一人構え、ホーリータウンの“虹夜祭”が、ゆっくりと幕を開ける。

それは“希望”の訪れ。

あるいは“絶望”の始まり。

それは地上から神へのすがりの声。

あるいは神から地上へ向けた忠告の声。
。

菖蒲は夢を見た。

真っ白な空間の中で、菖蒲は立ち尽くしていた。

ここは、どこ？

自分が何故ここにいるのか分からない。

聞こうにも、誰もいない。

否、人ならばいた。

菖蒲と同じ顔をした、青いエプロンドレスを着た少女。

少女は、にっこり笑う。

『私は“アイリス”。貴方は？』

「あ、菖蒲」

『あら、名前も“同じ”なのね』

瞳を輝かせ、少女　アイリスは笑った。

菖蒲にはその意味が分からない。

『私、貴方をずっと待ってたの』

「何故……」

そう言葉を発した時、菖蒲の顔が怖ばる。

真っ白な空間が、ガラスが割れたように崩れ、アイリスを中心に黒い渦を巻き始める。

アイリスは、にやりと三日月型に口元を歪ませた。

それは死神の微笑み。

それは“絶望”の象徴。

『 貴方を殺したいから 』

死神は、たった一言呟いた。

黒い渦が菖蒲の身体に巻き付く。

首や胸を圧迫し、呼吸すら途切れる。

「くッあ……………」

いつ死ぬか分からない恐怖。

狂ったように笑い続けるアイリス。

菖蒲は歪んでいく視界の中で、彼女に手を伸ばした。

情けないくらい身体を震わせて。

悲しいくらい涙を溢して。

涙目で、彼女の本当の名を叫ぶ ……。

「 ……ッ! 」

自分でも、なんて彼女を呼んだかも分からない。

でも。

自分でも分からない記憶の裏側に、彼女はいた。

不思議と、そんな気がしたんだ
……。

がばッ。

菖蒲は息を切らし、布団を弾きながら飛び起きる。
冷や汗が流れ、悪寒が止まらない。
わずかに震える手を握りしめ、前髪をかき上げた。

「……夢？」

未だ汗が止まらないが、呼吸はようやく落ち着いてきた。
ゆっくりと深呼吸をすると、次第に記憶が晴れていく。
確かノーティと話してて、ホーリータウンに戻って、そしたらバ
ルトが血だらけで、頭が真っ白になって……。
気が付いた時には、自分はカードを手にかかを叫んでいて……。
光に包まれた後はうる覚えで、ほとんど無に等しい。

私は、一体……。

菖蒲は不安を隠すかのように右手の二の腕を握る。
包帯が巻かれた腕が、微かに赤い悲鳴を上げた。
覚えてなくても、なんとなく分かる。自分が自分でなくなっていた
事を。

「あ、アヤメちゃんおはよー」

突然障子が開き、ひょっこりとグリフが現れた。
その後ろには百合。

そして ……。

「やっと起きたのか」

バルトが、苦笑ぎみに顔を覗かせていた。

菖蒲は目をぱちくりさせる。

「み、みんな……。てか、バルトあんた傷は」

「んあ？ ああ、百合が塞いでくれた」

「ゆ、り？」

何故、百合がバルトの傷を塞げたのかは分からないが、徐々に怒りを覚える菖蒲。

無論、百合ではなくバルトに対してだ。

人がどれだけ心配したと……。

わなわなと手を震わせ、うさばらしに手元にあった枕を思い切りなげつける。

枕は勢い良くグリフの頭を擦り、バルトの顔面に激突した。

「ぶほあッッ」

バルト、そのまま縁側から庭へ落下。
白眼を向き、ピクピクと手足を痙攣させる。

「あははは。バルト、だっさあ」

「あわわわ……」

グリフが手を叩いて爆笑し、百合は後ろで顔を青ざめている。
菖蒲は頬を膨らませ、ばすんつと布団を叩く。

「アヤメちゃん、すごいバルトの事を心配してたもんねえ」

「別にそんなんじゃ……ッ」

「照れない照れない」

額の包帯をちらつかせながら、グリフは菖蒲の肩を叩く。
菖蒲はパクパクと口を空回りさせるが、ごほんつと咳払いをした。
気が付けば、この部屋には古い彫刻や、壺などが沢山置いてある。
あきらかに金持ちが居座りそうな屋敷だ。

「……ここは？」

「わ、わたくしの家です。アヤメさん大分衰弱していたので、急遽
わたくしの家に……」

おずおずと答えながら、百合は菖蒲の隣に腰を下ろす。
グリフも、よっこいしょと座り込む。

「そうそう。アヤメちゃん昨日倒れてから目を覚まさないんだもん。ボクこのまま目を覚まさなかつたらどうしようかと思ったよ」

ま、倒れてから半日ぐらいいしか経ってないけどね。グリフはしれっと続ける。

事実、今は朝か昼間のどちらかだろう。

「私、倒れた……んだ」

「覚えてないの？」

グリフの言葉に、菖蒲は小さく頷いた。
全く記憶にないのだ。

「ま、まあ元気ならいいじゃん。てか、アヤメちゃ

「私は、私は一体なんなんだろう」

菖蒲はうつ向き、そして消えそうな声で呟く。

昨日の出来事も、さっきの夢も。

グリフも百合も何も言えない。本気で自身の存在が、分からなくなっている菖蒲にかける言葉が見当たらない。

「ばあかつお前はお前だろうが！」

へッ？

突然声が降ってきたかと思えば、いきなり顔面を襲って来た枕。

「ぐえッ」

菖蒲の顔に枕が食い込み、危うく呼吸困難になった。
鼻を真つ赤にし、菖蒲は涙目で縁側を睨む。

「バルトおお……ッ」

「さっきのお返しだボケ。俺は別にお前が何者だろうが、知ったことちやねえ。俺に害はないしな」

脇腹を摩りながらバルトは再び居間に上がり込む。
傷は塞がっても、まだ完全に治りきっていないのか。

「ただお前は“アヤメ”以外の何者でもない。昨日の事だって、まだ俺らの知らなかった“アヤメ”だろう。まあ……俺は良く分らんけど」

だから。

「くだらねえ事で悩むな。んな事で俺らは、お前から離れやしねえから」

そういつとバルトは、不器用に菖蒲の頭を撫でる。

グリフも笑みを溢し、百合も小さくコクと頷く。

菖蒲は歯を食い縛り、涙を溢すまいと何度も頷いた。

不器用だけど、その優しさが嬉しくて、何度も何度も頷いた。

「いつけないんだあ。バルトがアヤメちゃん泣かしたあ」

「はぁッ！意味分かんねえよ」

「……女の子を泣かせるのは、いくらバルトさんでも最低です」

「さ、最低……って、百合お前まで！」

挙げ句の果てに、最低最低最低と“最低コール”を始める一同。菖蒲も笑いながら、それに参加した。だか、それも長くは続かず。

「フオフオツ。賑やかじゃのお」

障子を開け、居間に入ってきたのは竹じい。

笑いながら、髭を引きずりながら、竹じいは菖蒲に近付く。

一同から消える笑み。菖蒲は布団に座り直し身構える。

「そんなに固くならんで良いんじゃないよ。アヤメさん」

「貴方は……」

「わしは“草壁 竹蔵”。百合の祖父じゃ。わしの事は竹じいとでも呼んでおくれ」

竹じいは、笑いながら菖蒲の隣に腰を置く。

菖蒲はこの緊迫した雰囲気の中、あの髭邪魔じゃないのかなあつと真剣に考える。

「さて、こたびの件 ディスファイアの事で少し分かった事があったのお」

「デイスファイアで……?」

険しい顔つきのバルトとグリフ。

誰も想像しえなかった今回の襲撃。その事で、こんなにも早く情報を得られたというのは、ある意味神業だ。

「そうじゃ。だからこそアヤメさんに話そうと思ってな」

竹じいの言葉に、菖蒲は目を見開く。

「わ、私……ですか」

「アヤメさんも、まだ何が起こっているのか分からんのじゃろ。その様子じゃと“いきなりこの国に連れてこられ、まだ大した事は聞いてないはず”」

別に隠していた訳でもないが、いきなり本心を突かれ、多少動揺する菖蒲。

バルトが隣で何か話しかけてくるが、耳に入らない。

この人は……。

私が人間の世界から来た事も。

全て知っている。

それならば、と思う菖蒲。

すると竹じいに向き直り、迷いなく深い黒き瞳を見つめる。

「教えて下さい」

居間に響く、少女の高い声。

「私、分からないんです。何で、何で私がここにいるのか。何で私が連れてこられたのか」

竹じいはただ瞳を細め、うむつと唸る。

バルト達は首を傾げるばかりだ。

「だから教えて下さい。この国の事、アイリスの事、デイスファイアの事、22年前の戦いの事……後、“ノーティ”のことを」

「ノーティ？ やはりあの“バカ猫”に連れてこられたんじゃない……」

しょうのない猫だ、竹じいはため息を漏らす。

だが、菖蒲はバカ猫と呼ばれたノーティに、思わず言葉が出ない。少なからず、彼はバカと言うほど馬鹿ではない。

「まあ……今回は奴のおかげで街が救われたようなものじゃ。大目に見ようかのお」

薄い髪をポリポリと搔くと、大きく息を吐きながら周囲を見渡した。

そこには、未だ状況が呑み込めないバルト。

眉を眉間によせるグリフ。

そして目をぱちくりさせる百合。

もし話すのであれば、彼らも知っておかなくてはいけない事実。

菖蒲は、喉をならし来るべき時を待ち構えている。

「じゃあ、話そうかのお」

ならば話そう。

一つ一つの悲しみを堪え、一つ一つの笑顔を抱き締め、“一つの記憶”を若者達に語る為に。

カード8：“強さ”

これは、これは。不思議の国に伝わる“希望”の物語。
。

昔々、不思議の国には一人の魔女がいました。

彼女は、誤ちを学ぼうとしないこの国の住民たちが大嫌いです。

なるべくなら憎たらしい顔なんぞ見たくもない。

出来る事なら同じ空気も吸いたくない。

まあ、さすがに空気を吸わないところちが死んでしまうので、“誰も近寄らない禁断の森”に引きこもり、とりあえず本を読んで暇を潰していました。

しかし、そんなある日の事　彼女は、持ち主の“希望”になるという“伝説のトランプ”の存在を知ります。

そこで魔女は考えました。

もし無能な住民達にこの力をかざしたら、彼らは私をどういう風に見るだろうと。

結果として彼女の頭によぎったのは、名声と栄光と地位。

それからというものの、魔女は“伝説のトランプ”を手にいれる為、不思議の国中を探し回ります。

しかし、彼女は“異端”でした。

住民達の敬いの声を求めていたくせに。

まるで、今までの憎しみをぶつけるように。

目に映る生命は全て呪い殺し。

神殿や神社を荒らし。

そして最後は、無人と化した街に火をかけて去って行く。

挙げ句の果てには、人工種族を生み出し、村人を虐殺を企む始末。

そんないつ殺されるか分からぬ恐怖に、当然の如く住人は恐怖に身を震わせていました。

それでも中には兵を率いて魔女に立ち向かった勇敢な街もありました。

が。

魔女の絶対的な“邪の力”の前に歯が立たず、そのまま壊滅してしまいました。

もはや彼女は暴走していたのです。

ただ単に人を殺める事を、返り血を浴びる事を、楽しんでいただけ

けなのですから。

すると、いつの頃からか人は。

そんな無敵で、冷酷な魔女の事を……。

『デイスペアー』と名付けていました。

同時期、とある街に“人間の少女”が舞い降りてきました。

少女の名は『アイリス』。

彼女は、この国の一つの“希望”に選ばれました。

それは“伝説のトランプ”の操従者。

彼女は、『虹の使者・アイリス』としてデイスペアーを倒す使命

を与えられたのです。

そしてアイリスは愉快的な仲間達と共に、デイスペアーを倒すための長い旅を始めます。

ある時は山を越え。

海を渡り。

地中に潜り。

あるいは、空を自由に飛び回り。

数々の出会いと別れを繰り返し、アイリスはデイスペアーの手下を次々と倒していきました。

そして彼女は様々な試練の元、とうとうデイスペアーと決着をつける時が訪れます。

力と欲に溺れた“絶望（dispair）”は、少女に問掛けました。

「何故、他の世界から来たくせに、この世界の事で命を張れるんだ

？」と。

アイリスは答えました。

背筋を伸ばし、はつきりと。

『目に見えない傷を、これ以上増やしたくないからです』と。

その後、アイリスはデイスペアーと激戦を繰り広げ、見事この長き戦いで勝利を掴む事が出来ました。

そしてその勝利により、不思議の国の平和を取り戻す事が出来ました。

しかしアイリスは、戦いが終わると何処かへ消えてしまいました。

“伝説のトランプ”を国中にはら蒔いて、大切な仲間すら別れも告げず、消えてしまいました。

彼女は今、どうしているのか、誰にも分かりません。

ただ。

「この国の虹が消えない限り、彼女はどこかでのこの国を見守っている。」

「この国の住民は、そう信じているのです。」

「これが、この国に伝わる“表向き”のアイリスの話じゃ。」

竹じいは、ずずっとお茶をすすりながら呟く。

ついでにお茶は、話の前に百合を入れて来てくれたものである。

菖蒲は、湯飲みを握りしめ、うつ向いていた。

「“表”……という事は、“裏”が　続きがあるんですね？」

「その通り。最後に、アイリスとデイスペアーが戦った部分があったじやろう。あの戦いでは確かにアイリスは勝った。しかし、デイスペアーは死ぬ間際、『彼女に呪いをかけおつた』」

菖蒲の目つきが、鋭くなる。

物語には無かった、隠されし真実。

「呪い……ですか」

「己の憎しみが、深ければ深いほど心を失う呪いじゃよ」

なんて事を。

菖蒲は口を固く閉じて、悪寒を抑える。

それを聞いたただけなのに、デイスペアーとアイリスの最終決戦がどれほど激しいものなのかが予想が出来た。

「つまり、アイリスさんが誰かを憎めば憎むほど、自分の心が無くなって人間としての人格を失うって事が……」

グリフが、湯飲みでずずっと温かい野菜ジュースを飲み干す。

てか湯飲みで野菜ジュース飲むな、馬鹿ウサギ。

そうツツコミを入れたくなる菖蒲だが、緊迫な空気なので咳払いで誤魔化す。

すると隣で誰かが唸り声をあげる。
バルトだった。

「でもおかしくないか。まあ誰にだって憎しみの一つや二つはあるけど、相手は『アイリス』だぞ？　そう簡単に心を消すほど相手を憎むような奴には思えないけど……」

バルトの意見に、竹じいは目をぱちくりさせた。

「な、なんだよ竹じい」

「いや、珍しくバルトが冴えてると思ってるのぉ……」

「“珍しく”は余計だクソじじい」

あからさまに不快を露にし、バルトは鼻息を荒げながら羊羹を口に
にする。

相変わらずの口の悪さに、竹じいも飽きれ顔だが、今は説教の時
間ではない。

「まあ、バルトの言う通りじゃよ。彼女は、誰かを憎むような子で
はなかった。むしろわしらが何か過ちを犯しても、笑って許してく
れるような子じゃった。事実、デイスペアーを倒した後の二年間
は、普通に暮らしていたからのお」

じゃが。

竹じいは、ぎゅっと湯飲みを握りしめる。

その目に映るは、過去の悲劇。

その目に焼き付くは、アイリスの涙。

「かつてアイリスには、とても愛していた男がおつてのお。じゃが、
その男はデイスペアーの戦い後、禁断の森の魔物に襲われて亡くな
っていた」

現場を直接見ていないが、あれは間違いなく事故だったと竹じい
は続ける。

それは笑顔を絶やさないアイリスでも、深い心の傷を負っただろ
う。

そして案の定。

「ある嵐の夜、事件が起きた」

現実の傷へと、生まれ変わった。

菖蒲は、思わずごくりと唾を飲む。

何の因果か。さきほどの夢で見たアイリスが、頭から離れない。「……嫌がらせか、はたまた冗談のつもりか。彼女に言ってしまったのじゃよ。』あの事件は事故じゃない。アイツは殺されたんだ』とな」

グリフは、思わず赤き瞳で竹じいを凝視する。

それは彼女の心の傷を利用した残酷な嘘。

菖蒲は、同じ女として嘘を伝えた奴に怒りすら覚えた。

「一体、誰がそんな酷い事を」

竹じいは、目を反らす。

それは無知な菖蒲に対する哀れみ。

だって、彼女はもうすでに本人と逢っているのだから。

まさか。

菖蒲の顔が、微かにこわばる。

嫌な予感と記憶の中の彼が、ゆっくりと重なっていく。

それは、菖蒲をこの世界に連れてきた“赤毛の猫”。

菖蒲を十六年もの間見守って来た“赤毛の猫”。

『いつもそばにいるよ』と言って、再び消えた“赤毛の猫”。

「の、“ノーティ”……なんですか」

震える声に、竹じいは深く頷く。

同時に彼が花畑で溢した一言が、心の中で蘇っていく。

『君には……僕と同じ想いをしてほしくないんだ』

ノーティがあの時見せた、悲しげな表情。

それは、自分がアイリスを崩壊させる引金を引いてしまったから。自分のせいでアイリスの心を消してしまったから。

だからこそ、ノーティは自分を責めた。

誰よりもアイリスの事を、愛していたから余計に……。

でもノーティが、アイリスの事を愛していたのかなんて。

まだ、確信はないけど。

でも、菖蒲には分かる。ただなんとなく、そんな気がしたから。

「恐らく奴は、その罪悪感から君をこの世界に連れてきたんじゃない。アイリスに代わる力を宿した、アヤメさんをね」

「でも、なんで私が」

「それはわしにも分からん。でも君は間違いなくアイリスの力を受け継いでいる。第一、このカードは“アイリスにしか使いこなせない”のじゃよ」

そう言っただけは胸ポケットから、スペードのエースを取り出した。

それは紛れもない、菖蒲が光の中で手にいれたカード。

記憶にはないが、デイスファイアを抹消した武器。

菖蒲は、なんとなくカードを視界に入れたくなくて目を反らした。

私は……そんな力望んでいない。

「おつと話が脱線したが、その後アイリスは呪いにより心無くしてしまふ。じゃが、彼女は意識がある内にカードを不思議の国全体にばら蒔いた。自分が消えたとしても、この国だけは守りたかったのじゃろつな」

それが“レインボーティア”。

カードの力を宿し、この街を守り続けるアイリスの代理。

これこそが彼女の最期の望み。

「それでアイリスは、結局どうなつたんですか？」

「分らんよ」

「えっ」

「恐らく彼女は、心無くしていく姿を誰にも見られなくなつたのじゃろつ。はたまた、心無くす前に行きたい場所があつたのか。彼女はむしろに一言も別れを告げず、この国から姿を消した」

菖蒲は、絶句するしかない。

きっと、アイリスは辛かっただろう。

誰にも見とられず、でも自分が壊れていく姿を見せたくなくて…。

本当に強情で、頑固で、でも弱気を見せなかった伝説の女性。

それがこの国の勇者が選んだ。

自分自身の末路。

いくら同じ力を受け継いでいても、菖蒲はそんなに強くはなれない。

もし自分が同じ立場になればきっと泣き崩れてしまって、それだけで最期の時を終えるだろう。

「強いですね……。アイリスさんは」

「じゃが、アヤメさんも“アイリスの生き写し”じゃよ。叶わぬ願いじゃが、アイリスと二人並ぶ事が出来たら、見分けも付かぬじゃろうな」

フオフォと笑う竹じいに対し、菖蒲は上手く笑えない。

ヘレンの悲しげな瞳を思い出し、とても笑う気分にはなれなかった。

きっとヘレンは、菖蒲の事をアイリスだと勘違いしたに違いない。ただど違った。

顔が似ているだけで、菖蒲はアイリスではないのだから。

本当に、彼女は望んでたのかな。

アイリスは、戦う事を選んだ自分に、後悔したことはないのだろうか。

「デイスペアーと戦わなければ、今も生きていられたはずなのに。」

「しかしこの二十数年の時を越え、今回の事件が起きた」

「それが昨日起きた、“デイスファイア”の襲撃だな……」

バルトが忌々しいと言わんばかりに、舌打ちした。

百合も昨日の惨劇を思い出し、うつ向いている。

「そう。デイスファイアは“デイスペアー”が生み出した人工種族
いや“呪われた種族”と呼ぶべきか」

「でも奴らはデイスペアーが死んだと共に、滅んだはずなんですよ」

「確かにグリフの言う通り。奴らは、デイスペアーの憎しみが具現化したもの……憎しみの根源が絶たれば奴らの存在も消える。じやが、昨日現れたのは紛れもない“デイスファイア”じゃ。これがどういう事が、分かるな」

一同は、黙り込む。

デイスペアーの憎しみを核として生きる、呪われた種族。

そしてデイスペアーを倒され、消滅した呪われた種族。

だが、奴らは昨日現れた。

今まで一度も目撃が無かったのに再び現れた。

「デイスペアーが、蘇った……とか」

菖蒲のか細い声に空気が更に重くなった。

今更ながら発言を後悔する菖蒲。

しかし竹じいは頷き、力強い瞳で見つめ返してくる。

「やはり、わしもそうとしか考えられん。理由は分からぬが、“デイスフィアの出現”、“アイリスの後継者の出現”は、きっと何か意味があるはずじゃ」

アイリスの後継者と言われても、いまいち菖蒲にはピンと来ない。しかし、竹じいは続ける。

「デイスフィアは間違いなく国中に散らばったカードを狙って攻撃してくるじゃろう。更なる力を、手にいれる為に」

「カードを……ですか」

「じゃから、頼むッ」

竹じいは菖蒲から一歩ほど距離を置き、両腕の裾を払った。

そして白髪頭を、畳ギリギリまで下ろす。

いわゆる土下座である。

「え。ななな何をして」

戸惑う菖蒲。

呆然とするバルトとグリフ。

土下座する自分な祖父を、複雑な面持ちで見つめる百合。

弱々しい背中を向け、竹じいは一生涯一番の願いを菖蒲に告げる。

「無理を承知でいっておる。じゃが ……」

『この国に起きている異常を突き止めて、ぜひアヤメさんの力でこの国を救って欲しい』

竹じいの願いは、こうだった。

当然、菖蒲には返答のしようがない。

何故なら、さっさと返る方法を探して元の世界に帰るつもりだったから。

無論、竹じいは菖蒲のそんな気持ちを理解してか少し考える時間をくれた。

よって竹じいは席を外し、今は四人で気まずい空気の中座っている。

私には、戦える訳がない……。

菖蒲は思う。

自分にはそんな勇気はないと、自覚している。

もしかしたらアイリスと同じ末路を辿るかもしれないのだ。

確かに皆を危険な目に会わせたくはないが、それ以前に他人の事で自分は若い人生に幕を下ろしたくない。

チラリと横を見れば、バルトは目を閉じて何やら考えているようだ。

バルトは、皆は怒ってるかな。

この国を救うと、即答しない私を。

否、怒らない方がおかしいだろう。

それは遠回りに、この国を見殺しにしているようなものなのだから。

だけど。

だけど私は……。

「おい」

思考を遮る、ぶっきら坊な一言。

バルトが横目でこちらを睨んでいる。

菖蒲は身体をこわばらせてしまい、返事すら出来ない。

「おいッ」

先ほどよりも強い言動。

菖蒲は更に目を強く閉じた。

「おいってばー!」

ぐいっと肩を掴まれ、菖蒲の身体は強引に横向きにされた。

目の前には、バルトの顔。

ツンツンに立てた銀髪が、鋭い眼光が、菖蒲を見据えている。

突然の事に、菖蒲の顔は急激に温度上昇。

顔が、近いッ。

菖蒲はこの時間に耐えきれず、つい頭を下げてしまった。

「う、ごめんなさい……ッ」

「ああ？」

「わわわ私、本当は凄く怖くて。もしアイリスさんと同じ結末になったら、って考えると……わ、たし……私ッ」

「はあ、怖い？ 何言ってるの。別にそんな事、気にしてねえし」

目が点になる菖蒲。

では、なんなんだ。この空気の重さは、明らかに、怒っているではないか。

「え……怒って黙ってるんじゃないの」

「怒る”って、何を怒るんだよ　ただ、一つだけ負に落ちない事があるだけだ」

それがなんなのか菖蒲には分からない。

しかしグリフも百合も大きく頷いている。

どうやら三人とも同じ理由で、黙っていたらしい。

「負に落ちない……って？」

「ああ。別にお前がアイリスの力を受け継いでいようが、いまいが俺には関係ない　　だけどなッツッ」

ずびしッ。

力強く指をさされた菖蒲は、ぎょっとしてしまっ。

「俺達はお前に騙されていた事実が発覚した今、黙っていられるはずがない！」

「へッ？」

騙されていた　　つまり嘘をついていたという事か。

しかし菖蒲には、全く身に覚えがない。

自分は何を言ったのだらう。

会話を思い出して見るが、他愛のない話ばかりで心当たりすらないのだ。

「私なんか言ったっけ……」

その問いに、お前は人外だとも言いたそうなほど、バルトの目が見開いた。

「“言ったっけ”。言ったっけ、って知らを切り始めましたよグリフの旦那あ」

“グリフの旦那”！？

「うーん。それはいけないニョロ」

なに、その気持ち悪い語尾！

「……あの」

「な、何。百合ちゃん」

「……」

「……」

「……物事をはつきりさせない方は、この世のクズだと思います」

百合ちゃああああんツツツ

菖蒲は精神に9999のダメージを受けた。

予想外の百合の一言に、菖蒲は軽く目昧を覚える。
もう着いていけない。この个性的すぎる三人に着いていけない。
すると、菖蒲の目の前でバルトが片膝をついた。
そして歌舞伎のように手を大きく降りかざす。

「さあさあ白黒つけてもらおうじゃねえかッ」

偉そうな口調。

しかし次の言葉は、とても馬鹿としか言い用がなくて。

「お前は“花族”なのか、“人間”なのか。記憶喪失なのか、そうじゃねえのかあ！」

「そつだそつだッ」

「……白状するのです」

菖蒲は思わず絶句してしまふ。

いや、それってさ。

間違いない。菖蒲は無実の罪で責められている。
だが、バルトは胸を張って続ける。

「黙ってても無駄だぞッ。竹じいは、俺達は全てお見通しだ。アヤメが人間だという事も、記憶喪失が嘘という事も、そして不思議の国ではない世界から来た事もッッ！（まあ、竹じいとアヤメの会話を盗み聞きしただけだけだ）」

いや、だからそれってさ。

菖蒲の額に浮かびあがる、血管の筋。

同時に菖蒲は指の関節をボキボキと鳴らす。

私、言った……よね。

花族でもないし、記憶喪失でもないし。

だけど信じなかったよね。

込み上げて来る殺意。

人生でこれほどまで誰かを殴りたいと思った事は間違いない。

「黙っていると言うことは凶星かッ。てかお前 ……」

「ば、バルト……ちょっと空気を讀んだ方が」

あはは。乾いた笑いを溢し、グリフはゆっくりと後退る。
百合の手を引き、あくまでもにこやかに。

「どうしたグリフ」

「…………た」

「はあ？」

「ボクー抜けたあツツ」

グリフは声を荒げながら、縁側に疾走。
そして障子をピシヤリと閉める。

さすがウサギ族だけあって、逃げ足も速い。

一人残されたバルトは、部屋の中で呆然とする。

「なんだアイツ。てか話の続きを」

バルトは、振り返る。

真後ろには、角を生やした女。

恐怖のあまり、バルトは直ぐさま首を戻した。

目が、やばい。

殺気オーラやばい。

このまま密室でいたら……。

ぞっ。

バルトが、慌てて障子を開けて逃走を図った。

しかし、障子が開かない。

「な、んで開かねんだよッ」

『バルト、君はボクラの為に尊い犠牲になるんだッ』

原因は、グリフが障子を押さえているからだった。

「ふざけんなテメエ！」

『だいたいボク思ったんだよねえ。空から落ちてくる花族が何処に
いんの。記憶喪失説だっけどっから出てきたん』

「オイオイッ。そっから否定に入んのかテメエッッ！」

裏切りとも言えるグリフの攻防。

『てか、ボク覚えてるんだよね。アヤメちゃんが、“私は花族でも
ないし記憶喪失でもない”って言ったの』

「は、はあッ。んな事言っただっけ……」

『……バルトさんは、鳥頭だから』

『あーね。三歩歩くと忘れるって奴か』

「おい待てコラ。今、鳥頭って言ったの百合なのかッ百合も障子押さえてんのかああコラああ！」

バルトの焦りと裏腹に、障子の向こう側では百合とグリフが呑気に笑っている。

『てか、覚えてないんならアヤメちゃんの神の鉄槌受け入れなよ』

「お、覚えてるぞッ。てか、グリフだって“嘘はいけないよ”とか言ってたじゃんか！」

『うーん。記憶にないニヨロ』

「グリフテメエエエ！そこを動くんじゃねえぞ鳥族の俺様が本気出しゃあお前なんて」

『残念。もう手遅れニヨロ』

「ご愁傷様、と障子の向こうで笑うグリフ。

同時にバルトの肩を掴む白い手。

ギギギと音を立てながら首を向ける。

菖蒲は、背後で不気味に口元を歪ませていた。

「あ、アヤメ……話し合えば分かる。うん。だから落ち着けて」

「うん。イヤ」

「イヤってお前

うぎゃああああ骨が砕けえぐえおあッッッ」

今日は晴れ。

一部、血の雨。

次の瞬間、バルトの悲鳴が草壁邸にて響き渡った。

ぶすぶす……。

バルトの頭から立ち込める煙。

彼は中庭の池の中に浮いていた。

グリフはケラケラと笑い、百合はバルトの顔を棒でつついている。

数分前まで、まさに修羅場だった。

まさに悲鳴のゲリラ豪雨だった。

まあ修羅場の主犯は縁側に座り込み、まだ息を切らしているが。

「いやあアヤメちゃんは強いッさすがは『虹の使者・アイリス』だね」

グリフが、涙目でお腹を押さえながら菖蒲の隣に座った。

「そんな事言ったらアイリスさんに失礼だよ。アイリスさんは、きつとおしとやかな人なんだから……」

そこに謙遜はない。事実なのだから。

菖蒲は自分の情けない両手を見下ろし、自虐的に微笑む。

「それに……私は、アイリスじゃないよ。私はそんなに強くなれないし」

「そう、かな。ボクには強い……としか思えないけど」

グリフはポリポリと頬を掻きながら、池に浮くバルトを見つめる。だいたい菖蒲の拳はデイスフィアの兜を粉碎したはず。そんな彼女が戦えない訳がない。

しかし、菖蒲は何も言わない。

「……うーん。アヤメちゃんは自分に自信が無すぎなんじゃないかな」

「えっ」

風がそのまま菖蒲の髪から滑り落ちる。
何か重りと共に、ゆっくりと。

「ボクはアヤメちゃんの事強いと思うよ。だって、アヤメちゃん一人でこの世界に来たんじゃ？ それなのに、君は涙一つ見せず、ちゃんと前を向いていた」

「……私、泣いたよ」

「うん。でも、それはバルトの為に流した涙だ」

それは弱さじゃないよ。彼はそう続けた。

菖蒲には、いまいち分からない。

「本当の強さって、そういうもんじゃないのかな。誰かを傷付けるだけじゃなくて、誰かを支配するもんじゃなくて、誰かの笑顔を守り続けるもんでしょ」

「そう、かな」

「そうだよ。本当の強さを持つ人は、誰よりも他人の為に涙を流せて、誰よりも他人の為に命を張って、そして誰よりも笑顔を絶やさない人」

そういいながら、グリフは菖蒲の頬を摘みグニョと持ち上げる。だから笑って笑って。と言いながら。顔が伸びているが、不器用な笑顔だが、菖蒲は今、笑っている。

それが、強さ。

「まあバルトの受け入りだからね、ボクにはまだ出来てない」

「バルトの………?」

「アイツは、“強い”よ。ボクは、その強さに支えられて今もここにいる。もちろん、百合ちゃんも」

「グリフ君も、百合ちゃんも………」

過去、この三人に何があったのかは分からない。

でもその出来事を越えて、この三人はここにいる。
強い絆の元に、ここにいる。
それは、菖蒲と神楽、加奈りんように。

「だからアヤメちゃんも、もっと回りを頼って良いと思う。君は一人じゃないんだし、力を合わせてこそ乗り越えられるものもあるよ」

『その通り』

突如、周囲に響いた凜々しい声。
ざぱつと池から這上がり、バルトがこちらに向かってくる。

貞子がお前。

髪をばさつかせ、不気味に手足を前進させる様はまさにホラー。
菖蒲とグリフは、咳き込みながらも這上がるバルトを呆れ顔で見
る事しかできない。

ある意味、彼の身体の丈夫さはギネス級なのかもしれない。

「バルト、君は凄いな。あの状況で人の話聞いてたんだ」

「まあな」

バルトは、ゲホゲホと息を切らしながらも這い続ける。
そして人差し指を、菖蒲に向ける。

「おいアヤメ、うさ晴らしに殴らせてやったんだから貸し一つな」

「えっ」

「だから俺の言うことを聞け。それで貸し借り無しだ」

バルト、にじつと笑う。

髪はボサボサで、苔すらへばりついているのに、菖蒲にはバルトがとてつかつこよく見えた。

そしてその条件が、本当に馬鹿らしくて。本当に不器用で。

『俺も、その原因探しに連れてけよ。誰も居ないよりはマシだろ』

でも“怖い”と本音を漏らした菖蒲に対する優しさを、彼はくれた。

菖蒲は声も出せず、バルトを見つめるしか出来ない。

そして、必死に歯を噛み締める。

噛み締めないと、わなわなと口元が震えてしまうから。

「だいたいホーリータウンにも飽きてたんだよな。だから自分探しの旅のついでに、『アイリスの使命』とやらに付き合っただけよ」

「あなた、本当に馬鹿……ッ」

菖蒲は溢れた涙を拭い、顔を反らす。

その頭をグリフが優しく撫でてやる。

「てか、バルト。君は良いところ持って行き過ぎじゃない」

「はあ？」

「ボクだって、行くんだよ。せっかくボクが先に言おうと思ったのにさ　ま、君らだけだと色々と不安だからねえ」

意味深げに微笑むグリフに、バルトは顔を真っ赤にした。

「ななな何が不安なんだよ」

「なーんかバルト怪しいんだよね。アヤメちゃんの事になるとすぐ取り乱すしさ」

えっ。

顔を上げれば、丁度バルトがグリフの頭を叩いていた。
髪が銀色なので顔が赤いのが丸分かりだ。

バルトが取り乱す？

そんな事ありえない。

すると、百合も静かに歩み寄ってきた。

にこやかに笑いながら、でも意思の強い瞳を向けて。

「では皆で参りましょう」

「えっ」

思わず全員が耳を疑う。

「わたくしも参ります。きっとわたくしの『癒しの力』はアヤメさんの役に立
」

「百合は来ちゃ駄目だツツ」

打ち合わせをしていないのに見事なハモリ。

百合は目を点にしていたが、他の三人は思わず笑ってしまった。

私には、まだ何の力もないけど。

私には、まだ勇気もないけど。

菖蒲は思う。

彼らは、他の世界から来た菖蒲の力になると言ってくれる。

こんなに弱虫で、薄情で、どうしようもない人間なのに。

「まっ。そういう訳だから」

この三人は、菖蒲を見捨てるような事はしない。

ぶっちゃけこの国を救う義理は、私にはない。

だけど、どうしても戦わなくちゃいけないなら。

それは、この三人を守る為だ。

バルトは菖蒲の涙を指で拭い、そしてボスツと肩を叩いた。

その後ろで、百合とグリフが微笑んでいる。

「俺達も着いていくんだ。だから二度と“一人だ”とか“怖い”とか言っんじゃねえぞ」

菖蒲は、ぎこちなく、涙目で、でも笑いながら頷いた。
そして、心からありがとうと言った。

バルトは本当に強い。

菖蒲は、この世界に来て初めて彼の大きさを感じたのだった。

カード9：歩みの前に（前書き）

約八ヶ月もの長い間休載してしまい、皆様にご迷惑をお掛けして申し訳ありませんでした。

スランプ上がりで、何かと文体がぎこちないかもしれませんが御了承下さい。

今後はスランプに左右されぬよう日々精進していきたいと思いますので、どうかよろしくお願い申し上げます。

カード9：歩みの前に

“白い”。

ヘレンがぼやけた視界の中で感じた、この空間に対する印象。

例えば白い天井、白いカーテン、白いベッド、そして窓から差し込むまばゆい白い光。

自分を包み込むたくさんの白に、ここは死の世界ではないかと嫌でも考えてしまう。

こ、ここは。

見慣れた自分の家でもないし、知人の屋敷でもない異空間。

ヘレンはベッドの中で身体をもそもぞと動かしてみよう。

多少の違和感が残るが、手足はちゃんと意思通りに動いてくれた。

手足は大丈夫みたいだ。

しかし、いざ起き上がるうにも右腕に何かがつっ張ったような感覚がヘレンの身体を止める。

「な……」

同時に胸を刺すような激しい痛み。

ヘレンは思わず呻き声を上げ、意思とは関係なくベットへと引き戻されてしまった。

な、んだ？

まず激しい痛みを感じた、自分の胸元を少し顔を上げて覗き込む。彼の白の視界に飛び込んで来たのは、一際目立つ“赤いシミ”。そのシミは胸に巻かれた包帯から滲んだもの、と気付くまで数秒の時間を用した。

そして、その上に羽織られているのは、いつ着替えたのかも分からない白い患者服。

違和感を感じた右腕を見れば、関節部分にくっつく透明なクダ。その先には薬品が入った小袋　点滴へと繋がっていた。

ヘレンはようやく状況を理解する。

ああ。

私は役場に戻る途中、デイスフィアに襲われたんだっけ。

まるで他人事のように、当時を思い出すヘレン。

空中で右肩から左脇腹にかけてバツサリ斬られた時、少なからず死を覚悟したものだ。

そこから先の記憶が無いところを見ると、恐らくそのショックで気を失ってしまったのだろう。

どういう経緯で病院（こい）にいるのか分からないが、斬られた時にショック死に至らなかった事や、気を失い高さ何十メートルもある空中から落下したのに生きている事は、素直に喜ぶべき事だと思う。

ヘレンは複雑な想いを抱きながら、ベッドから左手を出した。

あの時、私を斬ったのは。

間違いなく“デイスフィア”だった。

掌を黙って見つめ、青い瞳は溢れそうな哀しみを何とか堪える。

その目は遠い昔を見据え、左手は懐かしい少女の手を握っていた。

しかし、デイスフィアが復活するはずがないんだ。

私は、アイリスは。
親玉であるアイツをこの手で……。

“コンコンツ”

突如響き渡る、扉のノック音。

ヘレンは慌てて左手をベッドにしまい、顔を入り口に向けるが、扉は既に開きかけていた。

「フオツフオツ。死に損ねたかヘレン」

一瞬身構えるが、その来客者にヘレンはホツと力を抜く。

頭は水晶のようにピカピカで、顎に生える白髭は相変わらず床を擦る程長い。

ヘレンは何となく全てを悟り、寝たままだが皮肉っぽい笑顔を老人に向けた。

「ええ。なんとかまた日の顔を拝む事が出来ましたよ“竹蔵おじさん”」

竹蔵おじさんと呼ばれた老人は、満面の笑みを零し頷いた。

この老人は普段、皆から“竹じい”という愛称で呼ばれているが、“竹蔵おじさん”と呼ぶ者は今はヘレンしかいない。もはやおじさんとすら呼べない年齢なのだが、ヘレンはこの愛称の方が好きだった。

理由は二つあるが、一つはアイリスと過ごした思い出を大切にしたい為。

もう一つは、ただの嫌がらせ。

「全く……。医者からは昨日から朝にかけて山場だと言われていたが、要らぬ心配だったようじゃな」

「ははっタフさだけが取り得ですからね」

竹じいは全くじゃ、と呟きながら見舞客用の椅子に腰掛けた。

椅子の金具がいきいきと声をあげ、竹じいの微笑みに相づちを打つ。

「街の若者と役場近くを搜索している時にお前を見つけてのお……フォッフォッあれほど心臓に悪いものはなかったわい！」

「でも本当に命拾いしましたようです。貴方には感謝してますよ」

「いやいや、礼には及ばん。しかし……」

竹じいの声が次第にかすれ、寂しさを感じるような弱々しいものとなる。

「本当は、バルトに見舞いに来させるつもりじゃった……お前には悪い事をしたのお」

ヘレンは目をぱちくりさせる。

竹じいが罰の悪そうな顔をする意味が分からない。

こうして命の恩人が見舞いに来てくれたのだ。何も不満に思う事はない。

「バルトにも話したんじゃがな……奴め、強がりおって病院にすら行こうとせん。叱りつけたが、拳げ句の果てに『あの親バカが死んだら、手向けの花束を持ってやる』なんて抜かしおってのお」

「……ははっバルトらしいですね」

ヘレンは、くすくすと肩を揺らして笑った。傷口が悲鳴を上げるが、さほど気にしなかった。

本当に。

強情な所は“エミリア”そっくりだ。

親には分かる。あいつは強いから、人前で絶対弱さを見せない。^{ヘレン}幼い頃、母の死を目の当たりにした“あの日”から、ずっと変わらない。

ヘレンはバルトが見せた最後の涙を思い出し、固い頬を無理やり上げた。

「バルトは強い……例え自分の選んだ道が自分を苦しめるだけだとしても、絶対に後戻りはしないし、後悔もしない」

竹じいは目を閉じて、静かに聞いている。

「しかし足枷になる事実があると直ぐに現実から目を背けてしまう。“強い”故に“立ち止まる事を恐れる”　バルトは、そういう子なんです」

「確かに。あいつの“強がり”は“強さ”ではないのぉ」

肩を揺らす竹じいに対し、ヘレンは上手く笑えなかった。

自分の無力さが、息子を変えてしまった。それは紛れもない事実であり、避けられない現実。

ヘレンがベットの中で拳を握り締めていると、竹じいは何かを思

い出したかのように手を叩いた。

「そうじゃそうじゃ！ しかも、そのバルトなんじゃが ……」

くつくつと微笑む竹じい。それは、話の内容で笑ってるものではなく、思い出し笑いのものだ。

「今は、一人の少女に付きつきりだな。フォツフォツ昔のお前さんとアイリスを見ているかのようにじゃよ」

「えっ」

ヘレンは間が抜けた声を出してしまう。

別に驚くような事でもないが、バルトが女の子に興味を持つなんて考えられなかった。

まあ女の子とはそこそこ話すが、自ら関わろうとは絶対しない。

唯一の例外は、竹じいの孫である百合ぐらいだ。

いや、でも。

ふと、昨日の昼間に会った少女の事を思い出す。

アイリスにそっくりりで、愛らしくて、『アヤメ』と名乗っていた少女の事を。

まさか。

あの子が……？

すると竹じいは胸元から一枚のカードを指で取り出し、ヘレンのベッドに向けてひゅつと器用に飛ばす。

反射的だがパシッと左手でしっかり受け取るヘレン。

そのカードを見た瞬間、目が極限に見開く。

「これは……。」

それは今から二十二年前、ヘレンの前でアイリスが良く使っていた武器。

唯一の操縦者を失い、国中に飛び散った思い出のカード。

ヘレンはいきおい良く、竹じいの顔を見上げた。

「これはアイリスの　　ッ！」

「そうじゃ。不思議の国・四大元素を司る伝説のトランプ　　スペードA」

もう二度と見る事はないと思っていた。

竹じいはヘレンの動揺を悟り、ゆっくりと白い光溢れる窓の外を仰ぐ。

その白い光に視界を奪われながらも、耳を澄ませば復興を願う木槌の音が心に響く。

竹じいは、ベットで横たわるヘレンへと視線をずらした。

「話すとするかのお……昨日何が起こったのか。そしてワシの“推測”を　　……」

老人の口から、真実の欠片が飛び出す。

一つ一つのピースがバラバラにならないように整理し、分かり易いように、丁寧に、的確に話を進めていく。

その中には菖蒲達に話していない内容も含まれているだろう。

「そんな……ッ。」

頭の中で一つの真実が繋がっていく度に、ヘレンの瞳が苦悩に歪む。

誰もが忘れない思い出。

誰もが忘れたがっている思い出。

その陰陽の狭間の中で。

『アナタは私を覚えててくれますか ……。』

「さあさあッ。旅出前に第一回アイリス会議を始めようじゃないか

「！」

バシバシッ。草壁家宅の居間にて、グリフが扇子片手にちゃぶ台を叩く。

そこでグリフの耳に痛いくらい響く歓声と拍手を静めようとするが。

シー……ン。

歓声や拍手、罵声すらない現実。

グリフはウサ耳と頬を、ピクピクと痙攣させた。

あれだけ騒いでいるというのに、バルトは何事もないかのように頭にタオルを被せ（前話で菖蒲に池へ突き飛ばされた）ながら、縁側で銃の手入れをしている。

百合に至っては、居間の隅で何やらバスケットに花を綺麗に詰め、どこに持って行くのやら包装作業に没頭している。

菖蒲に至っては特にする事がないので、大人しく座っている

が、参加の意欲ゼロ。

皆、無言だが、口には出さずに馬鹿は相手しないとオーラがそう言っている。

うわぁ……。

なんて団結力のない仲間だろう。

問題はグリフが仕切りという所にもあるが、これはあんまりである。

かく言う菖蒲も議題に参加していないのだが、呆れて何も言えず、肩を落とした。

始めからこんなんで大丈夫かな……。

自分の信じた仲間には不信感を募らせつつ顔を上げる　と、ウサ耳が目の前でぐわんと揺れる。同時に今にも涙が溢れそうなグリフの赤い瞳が、菖蒲の目と鼻の先に現れた。

い、いつの間じッ

動いた気配すら感じられなかったグリフに、思わずヒツと小さな悲鳴を上げてしまう。

「アヤメちゃあんッ何でみんな相手にしてくれないのかなあ……」

「さ、さあ」

知るかツと内心想うが、とりあえず笑って誤魔化する。グリフは涙を滝のように流し、拳げ句の果てに菖蒲の肩まで揺らし始めた。

「ボク一生懸命やってるよねツめっちゃみんなの先頭に立とうとしてるよねッ！」

「た、たぶん」

「なんで一時間も前からこんな無視されてんのおツ」

き、気付いてたんだ。

「やっぱりボクの美貌のせいかなッボクの美貌が素晴らしすぎて顔を見つめられないのかなあ！　この孤独感は全てボクの美しさが罪なのかなあ教えてくれアヤメちゃんッ！」

「ちよ。グリフ君待っ……」

ガクガクと肩を揺らされ、魂が口から吐きでそうになる菖蒲。まるで暴走したマツサージ椅子に座っているかのようなうだ。

まあ一時間も前から（うるさい為）無視されていたので、とうとう精神的に限界だったのだらう。

しかし、限界に達しているのは菖蒲も同じだ。

肩を揺すられ過ぎて、口から魂が出ているような錯覚が彼女を襲う。

ヤバい。

は、吐く……。

大袈裟だが、このまま行けば多くの読者の前で醜態を晒す事となる。

そうなれば『不思議の国のアイリス』連載打ち切りの危機だ。

だが分かっているにもかかわらず。菖蒲はもう限界と、手で口元を押さえた。

「おいおい」

頭上から降り注ぐ呆れた声。

そして、グリフの暴走する両腕をがしりツと掴む。

「アヤメの口から泡吹いてんぞ、その辺にしておけ」

見上げれば、バルトがだるそうな顔つきで立っている。

するとグリフは、瞳を輝かせながら菖蒲から手を離すではないか。

た、助かった。

何とか醜態を晒さずに済んだ菖蒲は、畳に這いつくばりながらも吐き気と目眩を堪えた。

「ばあるとおお」

「ホントにうるせえな……せつかく銃のメンテナンスしてたのに」

不作為を起こしたら貴様のせいだ、バルトが嫌みつたらしく言うがグリフは聞いていない。

「だからって無視するなよッウサギは寂しいと死んじゃうんだよ！」

ぷんぷんと足をばたつかせる馬鹿ウサギに、菖蒲は殺意が湧いてきた。

お前の場合、寂しいと周りを殺すだろうがッ。

それに良い歳して、未だそんなガセネタを信じているなんて一步引いてしまっ。

だいたい寂しいとか言っている奴ほど、根性が座っているものだ。菖蒲はグリフに、学校のウサギ小屋で力強く生きるウサギ達を見せてやりたいと心底思う。

するとバルトは、ちらりと菖蒲とグリフ、百合を見て大袈裟にため息を吐いた。

「てか、旅の詳細決めるんだろ。んなもん、適当に決めちまえよ」

いかにもやる気の無さそうに、ガリガリと銀髪を掻き回す。暫し考えるような仕草を見せるが、すっと人差し指を水平に上げる。

その指先にいるのは、菖蒲。

わ、私？

何の事が分からず、菖蒲も自分自身を指差す。

「とりあえずアヤメ。お前グリフと旅の備品買って来い」

「はッ？」

一瞬何を言われたのかわからず、菖蒲は自分を指差したまま硬直する。

「やったあッアヤメちゃんとデートデート！」

後ろではグリフが何やら馬鹿騒ぎしているが、菖蒲の耳には何も聞こえない。

何を喜んでいるのかも、何でグリフと組まされたのかも、全てが納得行かない。

「んで、百合。お前は、俺ら全員分の水と食料を」

「……はい」

「旅立ちを明日ッそれまでにその他必需品は各自が用意する事、以上！」

以上、という言葉を理解出来ず硬直する若干一名。
目の前でバルトは再び銃の手入れをしようと、縁側に向かい始めている。

疲れた疲れたと呟くバルトの声に、菖蒲は我に返った。

い、以上つて……。

「納得するかポケエツ！」

「ぐおツ」

菖蒲が鬼神の如く、バルトのツンツン頭に飛び蹴りを喰らわせた。バルトはそのまま縁側を飛び越え、石庭へと頭から突き刺さる。グリフも百合も、石庭に生える奇怪なオブジェに言葉を失った。

「な、何しやがるツ俺を殺す気か！」

「わ、私とグリフ君が備品の買い出しつて……分かんないよ！」

「はぁ？」

息を切らしながら、縁側にたたずむ菖蒲。

バルトは目を点にするが、やれやれと頭から血を流しながらも縁側に座った。

彼の無言は、不思議と威圧感はない。だから、素直に話せてしま
う。

「だ、だって。私は今まで旅なんてした事ないし……簡単に備品な
んて言われても」

「んな難しく考えんなよ。旅に最低限必要なモノを買ってくれば良
いだけだ。例えばランプとか、ナイフとか」

「で、でも」

「大丈夫だよ。分からない事はグリフに聞けば良い、あいつは旅を
経験しているから」

え。

戸惑う菖蒲の視線は、居間にて立ち尽くすグリフへと移る。

「な、グリフッ」

バルトの振りに、グリフはあまり嬉しくなさそうだった。

「まあ君たちよりは、経験してるけどさ……てかバルト、頭の血拭
きなよ。いつまでも垂らしてる気だい」

しかしバルトは聞く耳を持たず、菖蒲の頭に手を乗せる。

菖蒲は、俯き気味だが。

「それに、アヤメは街に行つて新しい洋服を買わなきゃな」

「ふ、服？」

「まさか浴衣姿で旅には行けないだろう」

それもそうだ。菖蒲の元の世界で着ていた服はボロボロになって
しまったし、百合の着物では流石りゅうせきに旅には出られない。

バルトはにっこり笑い、縁側に上がり込んだ。
言い返す言葉が見つからず、菖蒲は口をパクパクさせる。

「じゃ、分かったらさっさと街に行けッ明日の旅立ちに間に合わな
いぞ」

菖蒲を跨ぎ、居間へ向かうバルト。

菖蒲は、バツと鳥少年を振り返った。

「じゃあ、その間バルトは何をしているのッ」

備品買い出しを菖蒲とグリフに任せ、食料と水を百合に任せたバ
ルト。

そういう自分は何も役柄を明かしてない。

バルトは、振り返る。

悪戯心溢れる、無邪気な笑顔。

「秘密」だ」

呆然とする菖蒲。

そしてバルトは、手をひらひらと振りながら屋敷の奥へと去って
いく。

菖蒲は怒りと悔しさで顔を真っ赤しながら、こう思った。

“逃げた”と ……

ざわざわと賑わうホーリータウンの商店街。

昨日のデイスファイア襲撃でまだ営業出来ない商店も多々あるが、木材を運んだり、木槌の音が響いたり、復興は順調に進んでいるようだ。

その中で菖蒲は苛立ちを露わにし、ズンズンと歩いている。

派手に歩くと浴衣が乱れるとか、そういう女性らしい事はあまり考えていないようだ。

何が“秘密”よッ。

自分がサボりたいだけじゃない。

バルトの憎たらしい笑みが、ここぞというばかりに菖蒲の心を掻き乱す。

もし屋敷に戻っても何もしていないようだったら、今度こそ石庭に生き埋めにしてやろうと思った。

「ずいぶんお怒りですねえ」

グリフは早歩きしながら、にこにここと話しかけてくる。

菖蒲は、見向きもせず声荒げた。

「グリフ君はムカつかないのッ」

「全然ムカつかないよ。だって、こんな可愛い女の子が隣にいるんだもんッボクとしては大歓迎さ！」

そう言われると、何にも返す言葉が出てこない。また顔が熱くなつて来たので、慌てて俯いた。

私だつて。

グリフ君の事は別に嫌いじゃないけどさ……。

菖蒲が求めている返事はそういう事ではない。

人に物ばかりを頼み、自分は何もしないバルトの事を聞いているのだ。

そんな菖蒲にグリフは何かを察したのか、苦笑をこぼす。

「バルトの事なら、今は怒らないであげて」

そつとウサギ頭を見上げた。

ウサ耳を抜いても自分より数センチ高いグリフ。

日に横顔を照らされながら見下ろすグリフの顔は、どこか大人びていた。

「あいつ、今は一人になりたいんだと思う」

「どうして？」

「う、うーん。それは言えないけど……」

グリフは困ったように目を泳がせた。

菖蒲は、また詰め寄ろうと口を開くがすぐに閉じる。

バルトだけに関わらず、グリフまでが自分に隠し事をしている。

それは意地悪で教えないのではない。何か事情があるはずだ。

頭では理解しているのに、何だか仲間外れにされている気分だった。

表情を暗くする菖蒲に対し、グリフはあたふたと手をばたつかせる。

「べ、別にアヤメちゃんに関わる事じゃないんだッ」

その一言に菖蒲は顔を上げる。

「バルトは、“君に心配をかけたくない”。それだけなんだよ」

街の喧騒に流されていく、グリフの言葉。

菖蒲は目をきよとんとさせた。

グリフは更に顔を渋りながらも、続ける。

「バルトは今、その……詳しくは言えないけど家族存続の危機に晒されて、ああ見えて凄く悩んでる」

「もしかしてツヘレンさんと旅の事でケンカしてるの？」

「ち、違うよッそうじゃなくて」

グリフは必死に言葉を選んでいるが、なかなか上手い説明が出来ないようだ。

彼なりに菖蒲が悩まないように、バルトが許す範囲で話そうと努力している。

「だけど、今はあいつを信じて欲しい。バルトは、仲間を絶対裏切らないから」

って、言うのは大袈裟だけど。グリフは、手をひらつかせて誤魔化す。

バルトが仲間を裏切らないのは、菖蒲が一番身にしみてる。困っている仲間を見捨てられないのは、一番良く分かっている。菖蒲は呆然と彼を見上げていたが、ふうと息を吐き出した。そして、未だ挙動不審な少年に微笑みかける。

「分かったから、グリフ君やバルトの気持ち」

事情は分からないが、ちゃんと菖蒲の事を考えてくれている。今は彼の言うとおり、バルトを信じてあげようと思う。

だから。

「もう大丈夫」

強がりに見えてしまうかもしれないが、菖蒲はにっこり笑う。グリフはそんな彼女を複雑な気持ちで見つめ、やがて右手を差し出した。

菖蒲は何の事が分からず、その手をじっと見つめる。

「さっさと買い物しちゃおっか。んで、早く帰ってバルトに言うてやるんだッ」アヤメちゃんに心配かけるな』ってね」

「ふふっそれはグリフ君も一緒でしょ」

その一言に、グリフは耳を萎れさせる。

菖蒲はまた笑いながらも、自分の左手を差し出した。

再び結び付く、一つの絆。

とても温かく、柔らかな手だった。

帰ったらバルトに聞こう。

もやもやしたまま旅立つなんてゴメンだ。

菖蒲はグリフの手を引きながら、街を歩みだす。

まだ、日は高い。

コツンと、小石を蹴り飛ばす。

バルトは一人、街中を歩いていく。

その顔はどことなく悲しみに沈み、そこにいつも強さは感じられない。

せつかく百合んちで寝てようと思ったのにな。

バルトは屋敷で百合に言われた事を思い出し、思わずため息を吐いた。恐らく百合も、ヘレンの怪我の話を知っていたのだろう。

菖蒲がいなくなった頃合を見て、百合はこんな事を言い出した。

「……バルトさんにとってアヤメさんは大切な人かもしれませんが、ご自身の大切なものまで失う事はないのではありませんか」

縁側から滑り落ちそうになるほどストレートな言葉だった。

別にそんなんじゃない、慌てて言い返そうしたが、百合の黒く澄んだ瞳に頭が真っ白になってしまった。

不覚にも見とれてしまったのだ。

日本人形のように美しい顔たちに。

そして硬直しつつ顔を赤めるバルトに、百合はバスケットを手渡した。

カーネーションやカスミソウ、バルトの知らない名前の花々がバスケットの中で所狭しと詰められている。

百合は今まで、コレを作っていたのだ。

持ち運び可能な小さな花畑に、バルトは目を点にした。

『これをヘレンさんにお渡し下さい……手ぶらでは気まずいでしょっ？』

そして今に至る。

そんな訳でバルトの右手には、花の詰まった籠がしっかりと握られていた。

百合なりの気遣いだが、バルトとしては今更病院に出向くのも気が引ける。

だからと言ってせっかく百合が詰めてくれた花箱を無駄にする訳にはいかない。

あああ。

本気で親父に会いたくねえ。

バルトは、ガクリと肩を落とす。

こんな所、菖蒲に見られたら殴られる所じゃすまないと思う。

元はと言えば、百合を留守番にして、自分が食料を調達すれば良かったと後悔するバルト。

今となっては遅い話だが。

とりあえず。

アヤメとグリフに会わないようにしなきゃな。

人ごみに混ざりながら小さくため息を吐くが、それは唐突にタイミング良く起きた。

「旅で必要な物は、まずナイフだね。バルトが言ってた普通のじゃなくて多目的用の方ね」

前方より聞き慣れた親友の声。

バルトの眉がピクリと反応する。

おいおい。

続いて聞こえて来たのは少女の声。

「へえッそうなんだ。じゃあナイフを探しに行こう！」

バルトの頬が思わず引きつる。

ははっ……まさか。

ゆっくりと背伸びをして、前方を見るバルト。人に紛れているが、浴衣姿の女とウサ耳男が手を繋ぎながら歩いているではないか。バルトはすぐさま道の端に備えつけられたゴミ箱の後ろに隠れた。

なんでコイツらがここに居るんじゃああッ！

声には出せないで、心の中で叫ぶバルト。

今すぐ飛び去りたいが、昨日の傷は完全に治っていないので無理

をすれば傷口が開いてしまう。

だからといって、このまま後ろを歩き続ければいつかバレてしま
うだろう。

考える。

考えるツバルト・スカルフアーザ！

お前の頭脳はそんなもんかッ！

冷や汗をダラダラと流しながら脳をフル回転させていると、視界
の隅に街の門が映り込む。

そうだ。

バルトは手を叩き、そして病院と逆方向に足を進めた。

菖蒲が、ふと気配を感じて振り返った。

しかし、そこには誰もいない。

ただ、一枚の白い羽が花びらと共に宙を舞っているだけ。

「気のせいか……」

菖蒲は苦笑しながら、髪をふわりっと振り、前を向き直った。

ここの花畑は、一年間ずっと咲いている。

枯れても、またすぐに次の世帯へと引き継がれていく。

ホーリータウン自体、ほとんど四季が無く、その温和な気候がきつと花の生きる力になっているのだろう。

バルトは、ゆっくりと花畑に足を踏み入れた。

サクリっという音と共に宙へ舞う、色合い豊かな花びら。

ここは、バルトの秘密の場所。

しかし、昨日一人の少女にバレてしまったけど。

しかし、彼にとってこの場所には、まだまだ別の思いが隠されていた。

バルトはゆっくりと花畑を歩んで行く。

それは花畑の奥。

目指すは花畑と森の境目。

そこに建てられているのは十字架の石。

その下にある石板にはこう記されていた。

『エミリア・スカルファーズ 824年～855年』

バルトは哀しげに微笑みながら石板を撫でる。

「母さん」……」

今はこの世に居ない母。

誰よりも気高く、誰よりも愛情深かった母。

そんな母との思い出が、昨日の事のように蘇っていく。

「この花、親父にはもつたないから母さんにやるよ」

多少の罪悪感はあるが、バルトは石板の上にバスケットを置いた。いつも墓に挨拶しないで帰るのだから、たまに花の一つくらい供えてやらなくては。そう思うバルトなのだ。

まだ、日は高い。

少しの間だけ母との思い出に浸ろうと目を閉じる　　が、バルトの目がすぐに見開いた。

そしてまた目を細め、鋭い眼光を放つ。

背後で人の気配がしたのだ。

殺気を感じさせるような、鋭い視線がバルトの背中を刺す。

しかし、デイスフィアのような重苦しい殺気ではない。

バルトは胸元に隠してあった拳銃を取り出す。

「……俺に何か用か」

「ああ、“忠告”しに来た」

憎しみは感じられるが柔らかな青年の声だった。

バルトは拳銃を前に突き出し、素早く振り向く。

その者の第一印象は赤。

もみ上げが少し長めの赤髪。赤いベスト。赤いズボン。

そして頭にちょこんと生える猫の耳や、尻尾まで全てが赤だった。

ただ赤ではないのは、宝石のような金色の瞳だけ。

猫族、か。

二人を挟む距離は、約五メートル。

バルトは、拳銃を握る手に力を込める。

「……親父から聞いた事がある。赤毛の猫は“悪魔に魂を売った禁忌の存在”だって」

本当にそんな猫がいるとは思わなかった。

警戒するバルトに対し、猫は無表情だった。

逆にそれが恐怖を感じさせるが、バルトは銃を握りしめて堪える。

「三つだけ、君に忠告しよう」

銃を向けられているというのに、少年に恐怖は感じられない。

猫は尻尾を風で揺らしながら、人差し指を立てた。

「一つ、“アイリスの前から姿を消せ”。さもなければ、君を殺す…

…」

「はあ？」

バルトは銃を僅かに下げた。

こいつの言っている事が良く理解出来ない。

いきなり姿を消せだの、殺すだの言われても無理があるというも
のだ。

その前にアイリスが誰なのかすら ……。

あ。

不意に、先程グリフと手を繋ぎながら買い物をしていた少女を思
い出す。

太陽のような笑顔が、とても印象的な少女を。

泣き虫で、独りではすぐに崩れてしまいそうな少女を思い出す。

アヤメの事、か。

菖蒲は二十二年前に現れた虹の使者・アイリスと同じ力を持つ不思議な少女だ。

バルトに“アイリス”と言ったら彼女しかない。

「な、何で俺がアヤメの前から消えなきゃいけないんだよ」

「彼女にとって、君は“災厄”となるからだ」

さわさわと風に乗ってノーティの声が花畑一面に響き渡る。

俺が。

あいつの災厄に……？

バルトは動揺を隠そうと、下げていた銃を再び水平に上げた。すると少年は中指を上げる。

「そして二つめ“君はいずれアイリスを殺す”」

バルトの頭が、余計真っ白になった。

“殺す”。

思い返すのは、母の死。

あの弱々しい亡骸が、血に染まった母が、不思議とアヤメと重なる。

俺が、アヤメを殺す……？

そんなの、そんなのッ。

「馬鹿言っなッあいつは俺の大切な仲間だ！ そんな、殺すなんて
」

「君は知らないだけ。“ノーティ”は “チエシャ猫”は全て知
っている」

赤毛が風で揺れる。

赤髪に花びらが張り付く。

そして、少年は ノーティは、薬指を立てた。

『最後に三つめ、“君にアイリスは守り切れない”』

「ッ」

もはや反射的だった。

意識よりも先に指は引き金を弾いていた。

ズガンッ。

耳を突き破るような、破壊音。

ずつと敵を凝視していたはずなのに、そこにノーティの姿はな
かった。

ただ反響音と鳥の飛び立つ音がバルトを包み込み、花びらが視界
に散っていく。

バルトは顔を恐怖で強ばらせ、荒い呼吸のまま銃から手を離れた。
そして、その場に膝をつく。

情けないことに、バルトの手はガクガクと震えていた。

それがノーティに対する恐怖なのか、全てを否定された絶望感な

のかは分からない。

バルトは色々な感情を抑えようと、軟らかな土へ拳を叩き付けた。

「意味分かんねえよ……ッ」

“アイリスの前から姿を消せ”

“君はいずれ彼女を殺す”

“君にアイリスは守り切れない”

まるで催眠術のようにぐるぐると回る、ノーティの言葉。

バルトは堪えきれず、両手で頭を抱えながらうつづくまった。

『今夜、アイリスを迎えに行く』

冷たく、恐ろしいノーティの声。

風と花びらに紛れ、完全に消えるまで……。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2295e/>

不思議の国のアイリス

2009年6月12日20時15分発行